

時 一九七〇年八月十八日  
場所 宮城聰宅

徳元文子

まえがき

徳元さんは、首里高等学校の三年生の課程を修業して、四年年に進級していられた。同窓の特志看護婦戦死者と戦病死者、ならびに戦死職員を合祀した慰靈塔、瑞泉の塔は、元の学校敷地跡、首里の桃原町にあって、毎年十一月の第三日曜日に同窓会によつて祭典が行なわれているそうである。

「生き残りの生徒より篤志看護婦としての教養を受けて戦闘に参加して各地で奮闘戦死した状況を詳細に調べ」てこの塔が建立されたと『慰靈塔案内』の著者、山城善三さんが書いていられる。

徳元さんの記録の中にも、篤志看護婦を予期して、看護学を修得されたことが出ていて、その予想通り、弾雨の激しい中を駆け廻つて傷病兵の治療に尽粹していられるが、ずいせんの塔に名を連ねずには命を全うされた。

米須部落の座談会は、東西二回に亘つて開いたが、最後に話して貰つた徳元さんには、時間の関係で、詳しく話して頂くことができ

た。その間、家にいましたが、その朝早く起きて、学校へ行こうと思つていますと、日本の飛行機がわたくしたちの家の屋根すれすれに、物凄い爆音を立てて飛んで行つたわけです。おかしいなあと思つていると、それから五分間も経たないうちに何十機という飛行機が飛んで来て、空襲警報のサイレンが鳴りましたので、敵機だな、と分つたんですよ。

わたしは、十・十空襲で、馴れていましたので、まさかこの部落には弾は落さないだろと思つていました。しかし母が、早く早く壕に行け、とあわてていらすのですから、わたくしは、「わたくしは大丈夫だからお母さん早く壕へ行きなさい」といつて、それで、父とわたくしが家に残りました。父が、お前も壕の中へ行けといいましたが、わたくしは、大丈夫だからといって、家の中に蒲団を被つて寝ておつたんです。

しばらくしたら機銃弾がバラバラ落ちて来ます、屋根の上に。屋根は、母屋は瓦と茅と半はんなんですよ。それで茅の中に機銃弾がズシップスッと入る音が聞こえますけれど、大丈夫なんですか、そのまま寝ておつたら、後で父が、こつちでは危いから早く壕へ行きなさいと言われてですね、それで壕へ行こうとしましたら、学校の方からオルガンの音が聞こえたんですね。

後の方が学校ですが、学校へ行きましたら、大田という若い先生がいられて、明日は山部隊の軍旗祭だから、二十四日の、いま「荒城の月」を教えておるけれども、文子さん教えてくれないかと言わられるもんだから、それで校長先生のお嬢さんに、わたくしが歌はうたつて、先生はオルガンをひいて、やつと教えたのです。でも、あん

まり飛行機が激しいので途中で止めまして、後の山の方へ登つて、松林の中で飛行機が何をしているかを見たんですね。大して恐いといふ氣持はありませんから、山手の方から飛行機の様子を見ていました。

午後になってから、うちの部落に焼夷弾が落ちまして、あちらこちら燃え出したわけなんです。それでわたくしは、朝から母と別れて、別の壕へ行つたわけなんです。そこへ大田先生が、学校の裏門の壕の守備警備をしていられた山部隊の長谷川中尉と飛行機の状態を見ていられましたが、四時頃でしようかね、敵軍の飛行機は引きあげまして、静かになつたもんですから、各家庭へ戻つてお夕飯の準備をしました。

その晩は何でもなかつたが、二十四日がまた朝早くから空襲警報のサイレンが鳴つて、沢山の飛行機が飛んで來た。今日はもうそれこそ大変だから、父も母もいっしょに壕へ行けといふ。わたしは今行くからといつて、母は先に行つて貰つた。父が家にいましたが、わたしはその時にも荷物を持って、壕へ行こうとするところですね。うんと早かつたでしれど、学校の校門の近くに来ますと、学校の東がわの方は平野で畠です。

東の大渡という部落から米須の部落はすぐ近いのですが、大渡の部落から飛行機はやって来るわけなんです。そこで機銃掃射されましてね、学校前の道路との間の溝に飛び込んで伏せたんですが、飛行機が西の方へ飛んで行つたので、後の山へ行きましたね。従兄弟がちょうどいっしょでしたのが、山の方から見たんですよ。ゆつくり見つたんですが、あの子は男の子ですが、お姉さん、お姉さん、向

それに、白梅の塔、ひめゆりの塔、積徳高等女学校慰靈の碑など、女子学生が篤志看護婦として、弾降る中を傷病兵士の看護に身をもつて尽し、自らもたおれて祀られているが、これ等の戦死女学生と同じく、篤志看護の任務を果しながら生命を全うした徳元さんのような、女学生篤志看護婦の体験を持った方には、これまで一人も出あわなかつた。

その上に徳元さんは、その時十六歳で、もっとも、記憶の柔軟性豊かな時期で、当時の実情を詳細に記憶していくのをわたくしちは前の座談会の時に感じ取つた。

さらにもう一つは、成人された今日だが、当時の純情時代の感情を、戦後の混雜、汚濁の社会悪に禍いされることなく持ちつづけていたがつて、本沖縄戦記録篇(1)において、もつとも長篇だが、平明で淡たんと、感情を露骨に示さない叙述が当時を生きいきと再現して、われわれに見せていく。蛇足のそしりをかえり見ず書きそえられた。

徳元文子(十六歳) 県立首里高女四年 有馬隊

学校が春休みで、三月の二十三日に出校することになつていまし

こうに何か黒いのが見えるよ、というから、彼の指す方向を見ました。

あれは船みたいだね、といいましたが、ただ黒く見えるだけです。その時ははっきりわからなかつたわけです。サシチングガマという米須の浜辺の一一番東がわの岩のところから小さく見えて来ました。船だね、といつてしばらく様子を見ていたら、ぐんぐん、ぐんぐん沢山ずらつと並んで近寄つて来るんです。肉眼では「きり見えるくらいになつたんですからね。

船だということがわかりましてからね、それからわたしは長谷川中尉のところへ走つて行きまして、只今南の方から船みたいなのが見えますが、といつて報告したわけです。そうしたら、「えー、そろか、といわれて長谷川中尉は、米須城の方へ駆け登つて、ご覧になつたわけですよ。その時もわたしは大田先生といつしよであります。だが、長谷川中尉殿もいつしよに見ましたら、だんだんだんさん近づいて、大分米須の部落の前あたりまで船団が来ているんです。

船は大きくなっていますし、飛行機がその上を飛んでいるんです。これは友軍かなあ、とおっしゃるんですね、敵だったらそこに発砲するんじやないかねと、中尉殿は申されましたけれども、しばらく経つて、喜屋武岬に近いところに船が行きましら、ドドンと弾を撃ち始めたんですよ。その弾は摩文仁丘の東があたりに落ちたと思うんです。

それから大あわてで、国民学校の教頭先生が、御真影を国頭の方へ保管にいらつたわけなんですよ。それでその奥さんと子供たち

やつておりましたが、大田先生と二人は、志村大隊の方で、看護婦として働くようになりました。

アメリカの飛行機は、五時頃になると退散するんですよ。どこに帰るか、軍艦の上に行くかわかりませんが、その頃からみんなは夕飯を炊きに出ていくわけですね。

二十三日の日は、最初の日ですから、びんと来ないわけです。山原がいいのか、米須がいいかわからないもんですから、みんなおうちにおりまして、晩ですよ、夕ご飯炊いて食べたり、いろんなことをして、二十四日になつてから、空襲が二日もつづいているもんですから、焼夷弾も落されてあちこち焼けるし、それでもおちは四、五軒だけ焼け残つていてます。そうしたことから、山原へ疎開した方がいいんじゃないかということで、馬車を持った人は馬車に荷物を積み込んでですね、一応は東風平あたりまでは行って、そのまま山原へ疎開した方もいらっしゃるんです。けれども艦砲射撃の音を聞いて、あつちも同じだから、自分の部落へ帰つて来た方がいいということで、戻つて来た方も大分いらされたようです。

それからは、朝起きると壕へ走つて行つて、荷物はもうすべて壕に置いてありますから、ただ寝泊りと、夜の食事をするわけです。が、近くの屋敷でご飯は炊くんです。壕の中ではご飯は炊けないんです。煙がずっと入つていますので夜が明けた後も煙が出るというところで、それに壕には入れるだけ、民間の人たちは入つていきましたので、そこで炊事して煙が出たら爆撃されるからということで、人の屋敷でご飯は炊いたんです。

一人、現在は小様の方にいらっしゃいますけれど、その先生のお子さんたちがまだ小さくて、その上病弱だったんです。それで大田先生と二人で、その子供たちを連れて来ましたようということで、子供たちを負ふして、教頭先生の奥さんも、艦砲射撃の中を、米須城の下の壕につれて来ましたけれど、物凄い艦砲射撃なんですよ。後からひよーん、コロコロコロと行くんです。それが輪の中から金属の球が飛んでいるような物凄い変な音で、あれでも多分遠くに飛んだと思うんですよ。だけれども耳をつんざくような音で、あれが落ちたら、ぐらぐらと壕まで揺れるんです。

わたしたちは、挖削臺カレバタケというところに入つて、その中にテーブルが二つ三つ入れてありました。上の岩でも壊れると大変だと思って、その下に入つて、その一日過しました。

それから、そこにいる若い人は軍に協力するようにしていました。ありましたが、わたくしたちも、学校から指示を受けていました。ちょうど看護学を習つてあるから、あなた方は地方の部隊に入つて、そういう場合は軍の方に協力するようにといつて。

父も母も、こういうあんばいだから、山原（北部）へ行こうかといつた。夜から荷物を纏めて、みんな山原へ行くんですよ。だけど

わたくしたちは、山原へ行くよりうちにいた方がよくはないかとうことで、米須の部落にとどまつておつたのです。

山部隊の志村大隊のヒヤラ隊という中隊ですが、その人たちがうちで炊事をしていましたが、その人たちがもし戦争になつたら僕たちのところへ来てくれといつましたので、そこの壕に一時は避難することになつたのです。それでわたくしも、いつ時は、そこで炊事を

それから、中部や首里などから、南部の方がいいからといって疎開して来られる方がたもおられました。それは四月に入つてからであつたと思います。それまでは部落の人だけで、夜は部落の中が賑かであります。昼はみんなが合同生活で壕におりますから、わつしよ、わつしよで壕が賑やかなんですね。

わたしの父母は、部落の人に志村大隊の方から壕を一つ提供しましてですね。その部隊に働いている者の親戚たちをその壕に入れることにしてあります。何か、スペイがいるということで、一般民の場合は、夜芋を掘りに行く場合は、部落の兵隊がついて、連れてい行くようにしていました。一班、二班と組をわけまして。それでわたしの父が一班の班長で、徳元正平さんのお父さんが二班の班長で、二つにわかれて、芋を掘つていたようになります。

その時は、わたくしは隊の方の炊事を行つてきましたので、畑に野菜取りに行つたり、半分の時間は炊事をするんですが、わたくしはほかの人のように、そういうことをしたことがないので、野菜を取りに行つても、いつも五十メートルも百メートルもおくれてついて狃いで行くといった有様がありました。野菜というのはおもにキヤベツであります。煙で米俵にそれをつめて持ちました。芋の方は、民間で取つたのを兵隊さんたちが、わけて持つて来ました。まあ、供出ということで、部隊へ芋をわけて持つて來ることもありました。

それまでは、ご飯というのは、芋ご飯を炊くこともあるし、米だけのご飯を炊くこともあります。それを飯盒に詰めて、二人で一つの飯盒ということにして、兵隊さんに食事を与えていましたけれども、

ど、米は玄米で来ていましたので、それで米つきという作業もありました。

四月の初めに、山部隊と球部隊とが入れ替りになりました。山は前田戦線の方へ行きました、球が米須部落に来たわけです。それで志村隊が交代して球の有馬隊になりましたので、わたくしたちは、そのまま有馬隊の方に勤めたのです。

志村隊の頃は、看護といつても大した仕事はありませんで、六、七名の隊員が、炊事の時に何か爆発して焼けましたのがいたので、それを手当てしましましたが、そのほかは、作業で怪我して来たのを手当てるくらいで、その頃は楽な仕事でございました。

そういうたぐいにすごしていましたが、さみだれですね、その雨が降る時だけは、飛行機の方も少くなつたんですけれども、四月の初め頃からは、飛行機が、まるで暴風前のトンボが飛ぶように、物凄く多かつたんです。

わたしたちは有馬隊に来てから、中村隊という四中隊の方に令怪我人が出たからすぐ来い、といって呼ばれたんです。その時に、大田先生と二人で行きましたら、敵に見つかって機銃射撃されたんです。中隊は山の方でしたが、途中岩に隠れまして無事に四中隊まで行きつきましたけれども、四中隊に行つて見たら、壕を掘るために怪我をしていましたが、怪我をしていても壕を掘つておつたんですね。それでこの人たちを治療して帰りましたが、四時頃になつていましたでしょかね、最後の飛行機でしたが、途中でまた機銃掃射をされました。そうしましたら衛生下士官が、その人が途中まで迎えに来ました。隊長が今、お目玉だから、迎えに来たということ

で、途中でバッタリ逢つたんですけど、有馬隊では、沖縄人はみんなスパイと見ていたのか知りません。白井という下士官ですが、その人に有馬隊が、ただただ娘たちを手離してはいかんぞ、といったといって、それで僕が、あなたたちが、今、髪洗つたり、洗濯をしたりしに井戸へ行つてますから迎えに行きますといつて出でいらっしゃったそうですがね。

有馬隊に替りましてからは、四月の初めから五月にかけて、山城部落の前の壕にいまして、それまでは患者が少いですから、看護婦は二人に衛生下士官がついているくらいで、軍医もいらっしゃらなかつたんです。それでわたしたちは各中隊を廻つて、ちよつとの怪我人の治療をしたり、山部隊の焼けどの人たちの治療したり、樂でありました。

四月の末頃から、山城の壕から畠は全然そとへ出られません。夕方の五時頃からは飛行機がいなくなりますので、その頃から、壕のそとでご飯も炊いています。五月のはじめ頃までは、まだそんなにきびしくはありませんでした。

それから、球部隊の有馬隊は、米須の裏がわの米須城趾へ移動しましたが、五月の何日頃でありましたか、ちょうどその時から大雨でした。そうしたら壕の入口まで浸水しまして、井戸の水がつかえなくなつて、その水を濾過して飲んでいましたがね。何日くらい雨がつづいていましたかね、雨降りの時だけは割りと静かでありますた。

はつきり日は憶えていませんが、前田戦線や、首里の戦線から下つて来るんです。追われて来るわけなんですね、首里の戦線から、

ドンドン、ドンドン迫られて来る。一般の人たちもみんな南の方へと来ました。五月の末頃ですね、わたくしの先生方も見えていました。

それから四年生なんかも来ていましたので、その人たちと学校の入口であつてね、「あいえー、元気だったね」と大声で叫んだら、「君たち、戦争だぞ、もっと静かにせんか」と兵隊に叱られました。

それでも、生きているという感激で抱きついて、同窓生でしたから、「ああ、元気だったね」と涙を流して喜んだんですけど、その同級生は戦争から生き抜いて、現在元氣で与勝（与那城村・勝連村）の方で教職についております。それからうちの部落の一期先輩も来ていました、その人も一年間ずっとといつしょでありましたから、喜び合いました。

また二年の時の担任の大庭先生、あの先生と、機織の小橋川という先生、このお二人の先生がわたくしの家をたずねて見えたというので、今その先生方どこにいらつしたの、とわたしは喜んで母に訊きましたら、井戸の方へ水汲みにいらつしたかもしれないよ、といつたんです。

米須部落は、井戸が少いんですね、東と西と後と三つしかありませんが、後の方の井戸は部隊が占領していますし、西と東としか使⽤していませんでした。

西の井戸は水が少し、東がわの井戸へこの先生方は水汲みに行かれた。わたしは各中隊へ治療に行くところを、その井戸へ寄つて、先生方を迎えに行きましたもんですから、ちょうどバケツに水を持って上つて来られるところで、先生わたし持ちましようといつて、先生方「元気でいらっしゃったね」と懐しくてですね、生きて

いてあえた、互に元気であうことことができたという気持でしようね、涙が出来ました。

そして、わたしの母のいる壕に入つて下さいと申し上げて、母の壕に先生方入つて貰いました。わたしの父は、五月の一日か、五日か、はつきりわかりませんが義勇隊に取られて、母だけがほかの人たちと壕にはいりました。

そこへ石部隊がやつて来ましたが、石部隊は首里高女のわたくしたちの学校の四年生が勤めておりましたので、小橋川先生は、年を取りておられて、体も弱つておられたので、学校の生徒たちと石部隊といつしょの壕に入られました。

五月末頃か六月のはじめ頃、各部隊の団体看護婦は、石部隊とともに後方へ下りました。しかし看護婦を纏めておく壕がありませんから、一応解散して、自分自分で各中隊や小隊と相談して入るようにということになりました。わたしの一期先輩の姉さんは、うちの部隊ではないんですが、山部隊の怪我人が下がつて来ていました、その山部隊の倉庫の中に怪我人が二、三十人おりましたので、そこの看護婦としていて貰いたいと向こうから頼まれた。そうしましようと相談して帰りがけに、わたくしたちがこの壕から出て五十メートルほど行つたところで、その壕は直撃を受けたんです。それでわたくしたちは命は助かつたが、その壕にいた兵隊たちは全滅したんです。それからこの姉さんは、前の自分の壕へ行つたんですが、その日の姉さんたちの壕が落盤して、そこで石が割れてしまつたので、安室（あむろ）さんという方に担がれて実家の壕に行きましたが、実家の壕で、安室さんと一人自爆して亡くなりました。

また大庭先生のことになりますが、二十名ほどの生徒といひしょに、その壕で、生徒たちの責任者みたいになつておられました。今ひめゆり服装学院の大庭先生ですよ。先生は終戦まで、学校の東がわの壕におられました。

五月の末頃だと思いますが、ドンドン、ドンドン怪我人が入つて来るし、山部隊の人たちも曉部隊の人たちも入つて来ますからもう星夜つてないわけですよ。看護婦二人だけですからね。睡眠なんかとれませんよ。

怪我人が引きつづいて入つて来ると治療してやる。たとえば腕を怪我して腕の上を止血帯で強くしめてあつたと思うんですね。そこでしめられておるもんですから、それで腕の先が真黒になつて、骨と皮がくついたまま、肉は腐つて、その真黒い肉が垂れ下がついるんです。そういう腐つた肉を切り取つて、そこをオキシフールで洗つて綿帯をしめてやるのですが、思うようには行きません。軍隊の場合は、山なら山球なら球というんですが、この人の場合は所属部隊を言わないのですよ。それでも、わたしたちが軍医殿にお願いしたので、後で軍医殿も見えてこの人は、切斷して貰いました。

この人たちは食べる物もないから、ずっとひもじい思いをして來ているわけです。一人の人はつんぽで耳は遠いし、一人はこういうようになつて怪我して來ていたんですが、つんぽの人も怪我をしていましたが、頭が少し変になつていたと思いました。この怪我した人が、看護婦さん、何かお握りでも残つていませんかというから、すべてみんなに配つて、何にも残つていませんがどうあります。

りましたから、炊事の方にお粥を作つて頂戴と頼みました。炊事の方は全部わたくしたちの同じ部落のものでありますから、遠慮なく頼むことが出来ました。そうして上げたわけです。

そうしたらすぐ眠つてしまわれたようでありました。しばらくすると、寝言か何かわかりませんでしたが、あーあー、と仰有るんです。それでわたくしたちは、少尉殿、少尉殿と起して、どうしたんですかご気分でも悪いんですけどと訊きましたら、いや、今、小隊長殿、天皇陛下万歳といつて兵隊が死んで行くような夢を見ていたようであつたから、僕はうなされていたのか、とおっしゃつたんですね。それからは大そう元気になられました。しかし怪我はかなり深いようありました。

そうしたらその中尉は、もう僕は食事も要らないけれど、僕の部下がそこの道路わきに三十名くらいいるから、もしご飯があつたら、小さいのをひとつずつでもいいからやつてくれないか、と仰有つたもんですから、それでは炊事の方へ頼んで見ましようといつこうで、わたしとマキお姉さん（前出の大田先生と思う）と二人で、バケツ二つのいっぱい、特別につくつて貰つて、昼ご飯といつてつくつてあるのをほかの人は、少なくともいいからといふのでそれから分けて貰つたんです。

炊事の方ではいつも余分に炊いてあつたらしいんですね。それをバケツ二杯分持つて行つたら、それは大変です。腋杖ついた人などが、そろぞろ、そろぞろ、われ先に岩陰や木の下から出て来るわけですよ。それで後一人という時に無くなつたんですよ。

それでそこで奪いつこしましてね、喧嘩みたようになつて、何だ

いたら、何かありませんかなあ、それではお塩でもいいから貰めさせて下さい、というので、わたしはお塩を貰つて来て、嘗めさせてやりましたけれども、この人たちが、前で話しました直撃をくらつた壕、あそこに入つておつたのです。

これが山だとわかると治療させません。絶対ほかの部隊の兵隊は治療してはいけないといわれていたんですよ。同じ日本人でありますから、どうして部隊がかわれば、他の部隊の兵隊の治療はしてはいけないですかと訊いたら、各部隊に医療薬品は配られているので、その範囲内しかしないから大事に使わないといけないんだ、と注意されました。だけれどわたくしたちは、気の毒でそういうことに構がら、片端からみんな治療してやりました。

曉部隊の何とかいう中尉が来ていましたが、この人が怪我して、治療してくれと来ましたが、ちょうどわたくしたちは睡眠時間なんですけれどね、看護婦さん、看護婦さんと起されたもんですから、どなたですかと訊いたら、僕は曉部隊の小隊長だけれど全員、みんなが怪我して、今、この部落に入つて来たが、治療してくれんかといつたわけなんですよ。

衛生下士官もどこかへ行かれておりませんで、わたしたち二人だけ医務室にいましたが、そこに見えたから、じや、治療しましようといつて、治療しまして、治療している間に貧血なつたんじやなかつたでしようか。ちよと危いように思つたので貧血だと思いましたから枕を下げて、休んで貰いました。多分栄養失調にもなつていらされたと思いました。それで、大分疲労して、いられるようであ

かああいう状態を見ていますとね、戦争って、こんなに非人間的なもんか、人間を浅ましくするものかなあと思いましたよ。一つの握り飯を奪い合つて喧嘩するんですからね。喧嘩はしないで下さい。今すぐ貰つて持つて来ますからしばらく待つて下さいと子供をなだめるようにして、走つて持つて来て上げたんですけど、飯を見る飛びつくんですよ。それでああいう腋杖をついた人たちが、握り飯を奪いっこするのを見ると悲しくなりましたけれどもね……。

それから患者はドンドンふえる一方ですから、やつぱりこの曉部隊の人たちばかりではなかつたと思うんですよ。わたくしたちは、余分に握り飯をつくつて持つて行きましたから、ほかの部隊の患者たちもいっしょになつていていたと思うんです。

それは五月の末頃だったと思うんですが、六月の初め頃になると、あちこちの山が艦砲やいろいろの弾でやられているもんですから、各中隊へ治療に行きながら、俳句を作つたり、「サイパンの島よー」というサイパン玉碎の歌がありますね、あれを、沖縄の島よーに代えて、「沖縄の島よ、泣き、怒り、奮えよ、擊てよ、奮えよ、擊てよ」と道を歩きながら、小さい声でよく歌いました。俳句といいましても自然に心に浮かぶまま「今朝の山、今夕には池となる」といったものがありました。

わたくしたちが治療に行く時は夜ですからその頃からは人通りのないところは静かだし、道に出ると人がいっぱい後方に下るといつて行きました。

その頃からは、部落の人たちにも怪我人が出ました。うちの母は、学校の東の壕に入つておりましたが、その学校の東がわの壕は

部隊が入るから、あなた方一般民は出なさいといつて追い出されたわけなんですね。

それから母は一人だから壕さがしして、自分の兄弟を頼って、学校の裏の壕へ行きました。その壕というのは、入口がただ一つなんですよ、人ひとり下りられる程度の、一メートルか一メートル五センチの梯子を置いて下りるくらいの深さの壕なんですよ。そこへ下りたら中は部屋みたいになつてますね。そこにみんな何かを敷きつめて生活しているようございました。

けれども、うちの母なんか後から入つて来たもんですから、ずっと奥の方へ。まだ下の方に洞穴があるわけですが、その洞穴の中間くらいのところに板を敷いて、そこにおきました。人が艦砲射撃の破片が頭に当りますが、骨が砕けていたわけなんです。そこから、脳味噌が脈搏と同じようにむくむくと出て来るんです、一遍には出ないで。あき姉さんと二人で出たのは取つて、これをそのままにして全部出しては脳だから大変だといって、ガーザであまり出ないようにしておさえまして、頭を繩帯で巻いてやつてですね。

出血がひどいもんですから物凄く痩せてしまつて、その壕にはこの患者は置けないから、今度は学校の裏がわの東がわの壕ですね、納骨堂がございますが、ご覧になつたことありませんでしたか。下は煙で、壕には部落民が入つておりましたけれど、その入口の方に寝台を置きましたこの患者を寝かしておりました。夏が近づいて、六月といいますともう暑くなりますが。それで暑いもんだか

ら、その患者を暑いところに置いたら大変だから、とは、いつてたんですが、そのままにしていたんですね。

そうしたら、このお母さんは意識はあるんですね、たしかなんですよ。それで、文ちゃん、あきちゃん、毎日来てわたしの頭を癒してくれよ、というから、はい、何んでもないですよ、すぐ癒りますよ、というて、ねえ、わたしのところは豚の脂も沢山あるから、これも持つて行って食べなさい、というんですね。何か食べ物でも与えていればいつも来てくれるという気持があつたんではないでしょうか。それで、軍は、わたしたちは食べ物はいくらでもあるからおばさんたちが、食べ物に困るからいいですよ、それいりませんよ、わたしたちは持つて行って自分たちでつくつて食べることもできなさい、ちゃんととつくられているものを食べるですから、いいえですよ、といったんですけれど、何かくれて、毎日来て貰おうと心にかかるんですね。

それで、毎日夕方の五時頃に来ますよといつて、それで毎日行って繩帯を取りかえてやつてましたが、その度に脳味噌が出て来てこの方たち夫婦はおられたそですかれど、子供たちは向こうは危険だからといって行かなかつたそうですが、それから一週間くらいで亡くなつたそうです。

それからわたくしと同級生で年は二つ上の人が、額の下に

破片が当つていきました。脳にはさわつていませんでしたので、怪我をしたら絶対に水は飲まないようといいましたら、それをよくつっしんで水を飲まなかつたので毎日治療しまつたら、早く癒つて元気になりました。わたくしたちは、このようにして、部落の人が怪我したと聞いたら、いつも行つて一般民を治療しましたが、これは部隊には内証なんですよ。部隊に知らずと怒られますからね、絶対一般民は治療してはいかんという規則がありました。だけど聴いたら治療してやらないではいられませんでした。今教員をして、仲根千代子という人も足を怪我しましたので、この人も治療してやつたら早目に癒りました。

こういったふうに民間の人も治療したし、それから兵隊もドンドン来るし、忙しくなりまして、両親に会う機会もせんせんない。父はもう行つたきりでぜんぜんあわないし、母のところへは、治療の帰りにたまには寄りますが、寄る暇がない、ほとんどないというくらいでしたからね。

六月の十日頃ですかね、八重瀬岳に敵が来た頃ですよ。与座岳あたりに来た頃ですかね。自分の中隊からほかの中隊に治療に行つて帰りがけに母のところに寄つたわけです。母の壕は学校の裏がわで、ちょっと山手、上にあがつたところでございましたから、そこから真栄平ですね、向こうの前の山が、ポンポン、ポンポンと何といいますかね、榴散弾ですかね、何んという弾ですか、この弾が一つ落ちるとポンポン、ポンポンと山が全部焼けて行くんですよ。破片みたように飛んでですね、その破片みたような弾で焼けたのか、ほかの弾で焼けたのか、それはわかりませんが、ポンポン、ポン

ポン弾が撃たれて、山がボウボウ、ボウボウと焼けて来るわけです。

それでわたしはお母さんに、お母さん敵は、アメリカーは、すぐそこまで来ていますね。家も山もあんなに焼けているものといつたから、お母さんは、あなたも疎開していればよかつたのに、こんな情勢になるとは夢にも思わなかつた、あなたでも疎開しておれば、わたしも安心して死ぬことができた筈なのに、もうアメリカーがここまで来ているとすれば、あなたが死んでも、わたしが死んでも母を恨まないで頂戴い、というので、今からがわたしたち孝行するんだと思っているのにお母さんどうしてそんなこというの、といつて、それからその壕で話し合つて泣いたですね。

そしたらその日は、どうしてなのか、夕方からずつとおそくなつてからも船から何機銃といいますか、ポンポン撃つて来るんです。その弾が山手に来るところ上るんですね。そうして平坦地に来ると下つて行くんですね。そういう弾がポンポン来るんです。それでお母さん、わたしが一応見てから出なさいよ、危いからといつて、その壕は梯子をかけて上りますから、前の方の壕の入口には、石で囲んで弾よけがつくられていました。まだ弾が激しいから今は出なさるなと止めました。その頃はご飯炊きにも出られなくなつてしまつたので、うちの母は澱粉を大事に持つていましたから、その芋の澱粉に砂糖を溶かして、これは栄養価も高いからこれを飲みなさい、とくれました。

その時母は、わたくしに、アメリカの兵隊はそこまで来ておるというし、あなたは部隊といつしょだし、そこにずっといると兵隊に

スペイといって掘まえられるから、若い子はやはり軍にいないといけないから、どういうことがあっても、もう親を恨まないで頂戴いね、こういう戦争なんだから、ということで話しあって別れましたけれども、弾が静かになって、日が暮れていきました。

それでわたくしはその壕を出ました。その壕から二メートルくらい行くと下り坂になります。そこをおりて行きますとそれからわたくしたちの壕は五百メートルくらいしか離れていませんから、まだ離れていますかね、米須の後がわの井戸のところでした。そうして別れたのが、母との最後でした。

それから時は、六月の十七日、馬乗りされるという日、わたしたちは夜も昼も、眠らないでみんな兵隊の治療でしたね。今では通信隊が来るし、うちの壕はこった返なんですよ。奥行が百メートルぐらいあります、壕の入口が四つあるんですよ。山の中間くらいに一つ、山の麓に大きな入口がありますし、それから向かって右がわに二つ入口がありました。四つの壕がありまして、右がわの壕と、山の中間くらいにある壕と、真直ぐに壕が掘られていましたが、これは武部隊の掘った壕で、米須城趾の下に、このような大きな壕を掘つてあるわけなんですよ。

それで正面が百メートルくらいありますからね、縦横百メートルくらいあつたんじやなかつたですか、それでわたしらちはその中心の四つ角のところに医务室を置いてありましたが、そこはもう全部患者ですよ。真正面の入口に、通信隊が来ているんです。球部隊の通信隊とかいておりましたがね。

兵隊がいっぱい入ることもできないんですよ。片方に寝台が

あって、片一方は通路ですが、寝台といつても戸板を並べてあるんです。奥の方には患者もおるし、ほかの部隊もみんな入り込んで来ているわけです。ですから壕の中は、奥の方からずつとこつた返しますが、そうするとまたほかの部隊が入り込んで来るし、患者は患者で、壕の中は人間のうずまきみたいですね。

それから医務室では足の切断やらもあるし忙がしいんですね、切斷は昼間りますが蠍燭も灯してあります。電燈も、普通の電灯がありますからね、看護婦は、赤十字の方たちも来ていましたのと、患者への飯上げまでもやりました。

それが十何日頃ですか、そんなにごつた返していた人間が、全部引き上げました。後方へ下つたつもりだったと思うんですよ。それで、手榴弾が不足だと、いうことで、大田先生、あき姉さんとわたしと二人に一個渡されたわけです。そしたら、あき姉さんといふ人は慶良間の方の看護婦さんと、軍医中尉と、それから衛生下士官二人と、どことこの中隊に行かななければいけないからということで、そこで大田先生と別れてしまつたんです。

それでわたしは、自分の中隊では一人しかいないから、ほかの人

たちと行動を共にすることもできません。わたしはこの部隊を守つてここにいますということで、炊事も同じ部落の方でありますし、また親戚も一人いましたので、わたしはあなたの方といつしょに行動させて頂戴いとお願いしまして、いつしょにいました。他の人たち、軍医中尉や衛生下士官なんかと後方へ下つて行つてしまつたわけですね。これが六月の十五、六日頃ですね。

そうしてうちの部隊は、十七日か十八日頃馬乗りされているんですよ。それとも十九日ですかね、そこがはつきりわかりませんですね。

それで明日馬乗りされるという日に、うちの母が井戸まで来ていましたそうですが水汲みにというので。その時わたしは他の中隊にでも行つていたのか、わたしがいなくてですね、母はあえなくてそのまま帰つたんですけど、母は十九日の晩、焼かれているんですよ。母の入つていた学校の裏の壕に何かドラム罐で石油か何かを流し込んで焼いたらしいんです。

わたしは、その日はわかりませんでしたが、後でそういう話を聞かされましたね。それで母だけでも自分といつしょに壕においておくことができなかつたんですね。それで叔父がいたんですが、その叔父もその壕に来ていたということで、叔父と三名この壕でいつしょにやられて死んだそうです。

これも後で聞いた話ですが、父は摩文仁岳の方へ行つていたが、解散になつて、母がその壕にいるということを聞いて、あしたやられたという日に父がまた母の壕に来ていました。

教員している叔父がいたんですが、その叔父もその壕に来ていたということで、叔父と三名この壕でいつしょにやられて死んだそうです。

です。その叔父は、叔母（叔父さんの奥さん）も教員であります。が、子供たち二人をつれて、三月一日に出るはずの船が、空襲、空襲で三月三日に出て、三月六日に電報が届いたそうですがれど、その電報も直接ではなくて政府からの通知らしいんです。その電報はブジツイタというのであつたが、叔父はそあつて一隻だけブジツイで、他のものはそうではないかもわからん、ほんとは見込みはないといつていたそうです。

教員していた叔父でも、アメリカ兵が来たら竹槍で刺し殺してやるといつていまして、世界の状勢を知らなかつたというのか、今になると、ほんとに日本は、世界の文化の発達しているのを何にもわからないで戦争やつたんだなあ、とつくづく思われるんですね。わたしは、アメリカがどれだけの武器を持っているか、日本と比較できない、あんなに武器を持っているあんな大きな国と闘かつたんだなと、今になつて考えられるわけですよ。

今晚は馬乗りされるという日の何時頃でしたかね。防衛隊の隊長当番で、比嘉さんといつて羽地の人ですけれど、この人はわたしと同年で防衛隊でしたもんですから、その人に、お兄さんは今教員しているらしいんですよ、羽地で。前は羽地だったんですけど、その人に貴方もね、わたしを手伝つて患者の飯上げをやつて頂戴いとつてお願いしたんです。そしたらうんうんといつて喜んで引きました。

二人で飯上げに行こうとしたら、ベンベンと撃たれたもんだから、わたしはバックするし、あの人は坂を下りればもう壕なんですからね、その壕に飛び下りたわけです。そして、文さん、文さ

んと物すごく大きな声で呼ぶんです。わたしがやられたと思つたん  
だそうです。呼んでいるがわたしは、敵がそこにいるから、返事し  
なかつたわけですね、そしたら駆け登つて来てから、「元気だのに  
返事をせんか」と怒鳴つたので、敵はそこにいるよ、といって、吃  
驚してですね、まあ、よかつた元気だったね、とそれから下りて行  
つて、握り飯を貰つたんですが、わたしたちのところへ撃ち込んで  
来たのは戦車砲でした。真壁から撃たれた戦車砲が、パット明るく  
なつて来たわけだつたんですが、それまでは戦車はなかつたんですね  
が、それからは戦車砲が、やると同時にペラペラ、ペラペラと音が  
するんです。破片が下に落ちる音か、何かに当る音か、轟でも落ち  
る音がしますでしょう。そういうふうに、ペラペラ、ペラペラッと  
音がするんですから、そとに出たら怪我するよ、ということがあ  
るもんですから、わたしは、黙つていて比嘉さんに怒られてからま  
た下りて行つたわけです。

そのわたしたちの壕の上に、米須城の按司墓というのがあります。  
そこには大勢の兵隊がいました。壕という壕、岩陰という岩陰  
はすべて兵隊ですからね。そういつたところはほとんど怪我人が入  
ついていたのではないですかね。その人たちは艦砲射撃の直撃を喰つ  
たわけですよ。そのように入つている壕を、トンボがですね、飛ん  
で来て、グルッと廻つて来て、変な空中返りみたようにして、引つ  
くり返つて行つたらですね、そこへ艦砲射撃がボボボと来るんですよ。  
もうトンボが逃げて行つたかねと思つたら艦砲射撃が来るんで  
すからね。

その艦砲が来たら、頭も飛んで来れば、手や足の骨が飛んで来た

て、足だけ曲つて出ている人もいるし、あちこちにそれが見えるわ  
けなんですよ。あれッと、そこの近くまで来たらもう道を歩けなく  
なりまして、またバックしましたが、そこには三十名くらいの人  
が、その壕（暗渠）には入つていたそうですけれどもね。この橋は  
ちよつと大きかつたんです。馬車が通れるくらいでしたが、それで  
そこをバックしまして山の麓の方から歩いて来たことがありました。  
その日、帰りに軍服つけた人が、軍服がはち切れそなに大きく  
なつて倒れているのを見て、おお、そこにもいるねと驚いたんです  
よ。

それからしばらく行くと、学校の東がわですね、あの道路がいつ  
ぱいですよ。人がいっぱい。第何中隊お願ひします。第何中隊お願  
ひしますときりに呼んでいるわけです、怪我人が。自分は第何中  
隊に運んでくれといふんですが、それなんか聞く暇はありません  
よ。道路の真中を北の部隊から後方へ、一般民やら兵隊やら元氣な  
人たちがみんなわっしょいわっしょい、もう現在の那覇の平和通り  
のもつとも雑鬧している時の人くらいたんじやないですか。

それだけの人がさつささつき通つて行くから怪我人は、そばに這  
つているんです。わたしは自分の中隊、第四中隊だったと思ひます  
が、そこまで行って治療して来ましてですね。その帰りがけに、学  
校の方に、こういう患者がいるつてよ、といふもんですから、行つ  
て見たら、壁の近くに動脈をやられてです。その血がザアッとコン  
クリートの壁に血が散つてゐるんですよ。それを見た時は大変だつ  
たでしようねと思いましたけれどもね、ああいう患者は、今から考  
えたら一発で死ぬことができ、却つて極楽ではないかなと思いま  
す。

したが……。

わたしの姉なんか、後で遺骨拾集を行つた時に見たら、足の骨は  
砕けていますけれど、即死ではないんですよ。そして一人助かって  
いる人は、わたしの姉と自分のお母さんとが一メートルくらい離れ  
ていて死んだわけですよ。お母さんは即死で亡くなつて、わたしの  
姉は生きていて春子、春子、すぐ立つてね、一発で当つて死になさ  
いよ。わたしのように生きていて、苦しんだらいけないよ、といつ  
たというから、死ぬくらいなら一発で当つて死ぬ方が極楽だね、と  
つくづく思いました。それで後になつて遺骨拾集の時に姉の遺骨を  
調べたら、足の骨やあちこち折れてしまつたが、急所はやられて  
ないから意識はあつたというわけですね。そういう死に方の人も沢  
山いたのではないかと想ひます。

そういうった人たちには、夫は戦死するし、本人（妻の意味、徳元  
さんの姉さんの意味を含んでいるようである）も戦死しました（が  
残つた子供には援護金はありません）。兵隊で戦死した子供がおれ  
ば、親は働き盛りであつても援護金は与えられますよね。ところ  
が兄弟は生きて、不具者であつても援助金というものは済金くらいも  
全然ない。何といいますか、年金とかいつて与えるでしょう。だけ  
れども、みなし児であつたり、怪我をして自分は重態であつても働  
かなければ食べることができない。親はいなくて子供は育つかも  
されませんけれども、終戦当時はそうでありませんでね。

わたしが日本政府にもっとも訴えたいことは、あの孤児たちが、  
どういうふうに苦労して、悲しい思いをして、肩身の狭い思いをし  
てね、一人前に育つて来たかと思うと、そういう人たちにこそ戦争

の援護金を与えて、戦後のその子供たちの正しい教育をすべきでなかつたか、そのみなし児になつた人たちがですね、いろんな不良児になつたり、祖母も二、三日前刺殺した例がありますね。ああいふらたちでも、この戦争のためにそんな性格になつたんじやないかな、とその新聞を読んで思いました。だからわたしは、そういうみなし児たちにも日本政府はある程度考えてやるべきではなかつたかなあ、とわたしは思いますけれど。

註、現在の高校一年年の年齢の徳元さんが、父母をはじめ、身寄りをほんと全部失ない、しかもこの後で自分も重傷を負い、現在も身体傷害者である徳元さんが、自分みずからその苦難を負つて今日になつているので、それは切実な実感であろう。ちょうど徳元さんの意見を書き終つたところへ、今朝の新聞を開いたら、偶然にも、徳元さんの意見を如実に実証している新聞記事が目についたので、この戦争孤児の具体的例を挿入することにする（一九七一年二月十三日、沖縄タイムス朝刊）。

『○…本土で働きながら夜間中学に学んでいる沖縄出身学生が、戦争で、生き別れとなり行方がわからぬ妹さんを捜していまして、『喜屋武久明さん（二九）』荒川区第九中学校二年で、出身地は西原村桃原四一番地、両親を戦争で失ない、当時四歳で戦災孤児として放り出された。

○…そのとき二歳の妹ユキ子さんと宜野湾村野嵩付近ではぐれた。喜屋武さんは、昭和四十一年、二十五歳で、職安を通じ和歌山県に集団就職で本土に渡るまで、沖縄で妹の行方を捜し出すこと

とができなかつた。

○…昨年四月、働きながら学ぼうと上京、荒川区第九中の夜間部二年に編入、常に妹のことが忘れない「どこかで生きているのでは…」と担任の河原先生を通じたずねてほしいと依頼してきた。

荒川第九中学校は荒川区東尾久二一二三。』

この記事の喜屋武さんの部落、西原村桃原部落は、一家全滅がなつているが、前記の記事中の喜屋武さんのように一人しか残っていない家は全滅に數えられていない。当時二歳の妹が、四歳の喜屋武さんはぐれているが、現在までのわたくしたちの調査では、二歳の孤児を顧みてそれを助けてやつた例はなく、永久の行為不明になっている。しかしこの二歳だった妹さんが、どこかで助かっていてくれることを祈る気持ちが湧然と起ころ。

わたくしの姉は、米須と伊原の真中あたりで、畑の中ですけれど、部隊に勤めていました。そのころ行動を共にした春子さんといふ人は元気なんですよ。その人のお母さんとうちの姉と三名、兵隊は後方に下るんですね。自分たちは戦争だ、戦争だといっていましたが、戦争どころではないんですね。武器がちがいますから。わたしたちが見た範囲でも、戦争というものはこんなものかねと思ひました。

ちょうどわたしといっしょにいました手の無い姉さんのお姉さんといって、「たま」という姉さんですけれどもね、その姉さんが子供何名かを連れて、夫は戦争に出てですよ、その壇がナーシングンドアブ小（アブは自然壇のこと）といって、学校の近くの壇です。ある六月の十六日か十七日の晩、わたくしたちは馬乗りされたと思うんですよ。その日にちがはつきりしませんがね。その日から二、三日経つて歩いて行く途中で、夜ですね、やられているんです、畑の真中で。それで一人が助かつたために後でアメリカ兵が来てですね、二人を埋めて、水筒なども置いて、この春子というのはまだ若かったけれど、その子一人を捕虜にして、それは二十日後だったと思ふんです。沖縄が玉碎になった後でなかつたですかね、その人が捕虜になつたのは。

六月の十六日か十七日の晩、わたくしたちは馬乗りされたと思うんですよ。その日にちがはつきりしませんがね。その日から二、三日経つてからと思うんです。ほかの壇に突破しようとするところを、宮城さんとおっしゃったですかね、屋我地に散髪屋さんをしていらっしゃるらしいですよ。この人が手足かどこか無いんだけれど、その人といっしょに突破しようとしたところ、あの人が倒れたからもう駄目だということでわたしたちはそのまま壇にいました。

ちょうど壇に帰つたところを看護婦さん、看護婦さん、と呼ぶんですね。それで、あなたはどここの炊事婦だったの、とわたしが訊いたら、看護婦さんお水下さいといふから、女の声だけれど、そしてあなたとこの炊事婦だったのといつたら、いいえ、僕は防衛隊ですよ、という、おや、あなた男なの、女かと思ったら男なの、というと、そうです、といつてから大変水が飲みたいから水飲まし下さいというので、あなたの水飲んだら危いから出血するから水は飲まないで置きなさい、我慢して頂戴いといつたら、じゃね、ガ一です。

ゼに口拭くだけ含まして下さいという。わたしは口拭いたり顔拭いたりするなら、ちょっと濡らしましょうねといつて濡らしたわけですよ。濡らしてやつたら、それをしきりにスヌスヌと吸つていいんですよ。あ、あなたそんなにするために濡らしなさいといつたの、それくらい口を濡らす程度だったらしいが、ゴクンゴクン飲んだらいけないよって、注意しました。

ちようどその日はもう医療の方もごった返していました。重態な患者はみんなモルヒネですか、モビモビといつていたんですが、重態の患者は見込みなしだから飲まんさいということで飲ましましたけれども、また注射をうつたりして、やはりモルヒネの注射です。飲ますと、余計飲まさないと死なんんですね、それで注射を打つんですね。

患者は、寝たつきりの人たちは壕から出られないが、飼える人はみんな壕から出て行くでした。やつぱり突破しようという気持ちがありますから、足がなくても這つて出られるくらいの人はみんな出て行きました。いくらかしか残っていません。それでその晩馬乗りされたんですよ。

晩で、井戸でご飯を炊いていましたから、その部隊のご飯は、ほかの防衛隊とか、ほかの隊の人とか、みんなめいめいで飯盒に炊きます。

ちようどうちの隣村の知っている人がおおりまして、わたくしなんか、やがて弾にやられるところを防衛隊の壕に駆け込んで行つたといつたでしよう、いっぱいしていましてね。それでこの人は新疆ツネラさんというんですがね、名城の方で。

ですよ。その時ですよ。オイ、軍隊のお偉い人たちは大変だね。自分で命ばかりしか考えていないね、あんなにみんな逃げるといつて、逃げる準備だけしかしないよ、といつて話して笑つたんですけどともね……。

それに防衛隊長といつて中尉なんですよ、その人は中村中尉といつたんですね、それから何とか准尉といつて二人は、壕の中から一步も出ないんです、そとに、馬乗りされないうちから。戦争といふものを、あの人たちは全然わかりません。やつぱり兵器廠の人で、戦闘部隊でないから、そういうのが恐くて出ることができなかつたかもしりませんが、だけれどもあの隊長が、怪我をして兵隊が帰つて来ますでしよう、「君は武器はどうした、武器は軍人の魂だぞッ」といつて怒るんですけどもね、あれを見て、ほんとにこの隊長は偉いのだろうねと思っていたのに、敵が目の前に来て、馬乗りされるといつたら、もう逃げるといつて大あわてなんですよ。

あんなのを見ていると、沖縄の人はもう真面目で、ほんとに純で、國のためならとあんなにして、弾運びなんかですね、防衛隊なんか一生懸命にやつているのに、隊長たるものがあんなに壕の奥に隠れて、そして逃げて行くのかねと思つたら、もう憤慨しましてですね。になると、ほんとにあんな戦争といつてあるもんかとわたし思いますがね。あの時、隊長がああいつて逃げる場面なんか見ていると厭な感じではありましたが、その時までは、隊長、隊長といつて偉い人だとしか考えなかつたんですね。それで戦争のために、人間の心が、どんなものであるということがわかつて來たような気もして來ました。

この人が、あれ、あなたがたもこだつたのかね、元気だつたか、今日はこうこういうんでおいしいご飯が残つてゐるが、あなた方食べるかといつたが、今は腹いっぱい食べたからいらぬよ、といふのに、おい饅詰などもあちこちの倉庫から沢山盗んで来てお沂いご飯をいっぱい炊いてあるから食べなさいという。いいよ、いらないよといつたのに、まあ、半分でもいいからまず食べてごらんといわれ、じや、こんな沢山食べられないから、半分は比嘉さん上つて、といつて半分ずつ分けてですね、食べたらおいしいんですよ。それで、わたしたちの部隊の御飯よりあなた方のご飯はおいしいねといつて笑つたんですけど、そういうた面、知つた人にあうと懐かしくて、楽しかったわけですね。そうして話し合いをしましたが、それからまたお握りをつくつて患者の翌日の食事とですね、自分たちの食事とを運んで行きましたけれど。

そうしたら今晚のうちにこの壕から早く出ないと危いと思っていましたが、案の定、その夜が明けたら馬乗りされたと思うんですよ。それからもう一步でも出ると弾でパンパンやられるという話でした。その前に、一人の炊事婦は足を怪我しまして亡くなりましたが、それからまたお握りをつくつて患者の翌日の食事とですね、自分がアリックサックにいろんなものを詰め込んでから逃げるんかいわけなんですね。それは馬乗りされる十日前頃のことでした。

それからまた、あしたは馬乗りされる、移動しなければ危いと思つた晩ですよ。隊長が、隊長当番はいないかあ、と大きな声で怒鳴ります。その方は少佐だとはいつていましたが、ほんとの少佐であるかどうかはわかりません。その少佐殿がいらっしゃって、その前に防衛隊の中尉と准尉がいて、その隣りに少佐がいて、少佐の後に炊事の五名とわたしと六名いたわけなんですが、それから寝ころんですね、二、三日ご飯も炊きません、みんな飲まず食わずにす。

それで上の岩からちゃんと水が落ちますね。その雪の落ちるところに軍の食器を置いて、その水がたまる時に飲むんすけれどもね。こんな大勢の人数ですから、いつ誰が飲んだかわからないんですね。それで、何時間くらい人が歩く様子がなかつたから、水が溜つたんじやないかなと、その間隔と、それから水の音を聞きわけるんですね。最初水が空っぽの時はカンカンとするけれど、水が溜つたらポンポンと音がするんです。その音を聞いてわたし水飲みに行きましたがね、それでわたしが飲む間は沢山水があるんですね、またわたしが起きて行くと女人がみんな起きて水呑みに行きましたから、あの人たちの分は残して置かんといかないと思つて、食器は五つ六つ並べてありますから、それを一つずつ飲んで、早く飲んで来なさいというようにして、水だけ飲んでいました。

れども、もうハッパかけているとしかわたしたちには思われませんでした。壕の中にいますから、何が何やらわかりませんが、物凄い音で、パンパンとしますからね。これは壕の上でハッパをかけて、わたしたちの壕はやられるんだね、と思つたんです。

ところがそうではなくて、あのこの前でいつしょでありました久保田次郎先生（米須部落東地区座談会同席）方が捕虜されて行く時に、わたしたちの壕の前に戦車をですね、六、七台並べて、盛んに撃つていたそうですよ。戦車砲を撃つている音ですけれど、ハッパをかけておるんだと、この壕を壊すためだねと思っていて、その時は感ずかないわけです。

今から考えて見たら「あはあ、牛島閣下がそこに逃げて來たことを、アメリカはわかつて、そこに戦車を並べたんじやないかな」と想像されるんですね。何しろ牛島閣下がいらっしゃったのが、二十一日か二日頃の晩ではないですかね、牛島閣下と二人のお伴の人と三名いらっしゃったわけです。それが何箱といいますか、これは貴重箱といいまして、球部隊か何部隊のものかしりませんが、壕の四つの入口の山の中間頃にある入口は、一メートル五十センチくらい下りて來てから真直ぐの壕はありますがね。一メートル五十センチくらい下りますとちょっとと行って、角になつていますが、その角のところに板を敷いて部屋をつくつてあるわけです。その上方に箱が三つかさねてあつたんです。大きな急救箱でも医療箱でもなかつたようですよ。医療箱はわたしたちのところに二つ置いてありましたけど、大きな箱三つ並べられているのは見ましたけれど、その箱の前に三名坐られていましたよ（牛島というが他の参考では？）。

そのちよつと前ですが、わたしたちのところは、晩なると静かでみんなじつとしていたが、中村中尉という防衛隊長が、その方が、僕たちはこの壕から突破するなら、わたしたちもいつしょに突破しようかなといつて、出ようとして中尉殿たちの後をついて行ったわけです。そうしたら中尉殿に向かって、わたしなんかそれまで牛島閣下であるか、誰であるかはつきりはわからないでけれどね、中村中尉がみんな下れ、下れ、というんですよ。その中尉に、今突破する人は早くその壕から出なさい、僕たちは今爆雷かけるから、出なさいとおっしゃつたらいいんですよ。わたしたちはうしろの方だからそれまでは聞こえなかつたんですよ。

それで中村中尉が下れ下れというもんだから、わたしたちはそのまま中尉殿がそこで自爆なされるなら、いつしょに死んでいい」といつて、またもとのところにこの人たちは寝たわけですよ。わたしたちは、そとへ出たつてアメリカ兵に撃まつたら、女の子はどんなにされるかわからんといつてたので、恐いから出られないわけですよ。それでそのまま壕に止つていたんです、少佐殿もいられたし、また一般の兵隊ら大勢おりましたから。

それからどれくらい経つてからでしょう、「もうみんな出た

か」という声が聞こえたが誰も返事をしないし、牛島閣下のいられるところからの道路に沿つて、患者も寝ていてますし、わたしたちの通りにもあちこちに患者が寝ていましたからね。それから天皇陛下万歳という声を三回唱えると同時に、バンと音がして、万歳万歳という声が聞こえたんですよ。

ああ、もう自爆なさつたんだね、ということで行つて見たら、もう、散りぢりばらばらですよ、そこが。その箱も全部駄目ですよ、眞近かには行かなかつたけれども、ある兵隊が行つて来てですね、沢山お金があつたよ、取つて来て塵紙にしなさい、といったので、何するの、そんなもの取つて来て、といったんですが、そのために戦車が来たのではないかと今は思ふんですけど。戦車は、牛島閣下が見えた晩頃からではなかつたかと思ひますが、その後二、三日くらい、戦車砲を撃つのはつづきましたよ。壕に撃つたのではなかつたですかね。

わたしたちはただハッパかけているのではないからいにしか考えていませんでしたからね。兵隊が壕掘る時によくハッパをかけていましたから、ハッパをやっているなんだなと思つたんです。機関をお皿に入れて、火を照けても、震動によつてバット消えるもんですからね、今つけたかと思うと消えるし、また照けたら消されますからね。これはどうしたのかね、今この壕を壊されているのではないかね、ハッパかけられているのではないかね、と思つたんですがね。もうそれからは、そこには出られないんですよ。ずっと壕に入り込んで、飲まず食わずでやつていましたが、わたしたちは水を時たま一日に二回くらい溜つた時は飲むというぐあいで。それから四、

五日くらいは、一食も食べなかつたんです。それからもう体が寝台に引つついているみたいにですね。御飯も欲しいと思わなければ起きようという力もないわけですよ。ただただだらうとしているだけで、ご飯を炊いて食べようという人は誰もいないし、またそこに出たら大変だという考え方しかありませんから。

それから軍医中尉、大田あき先生を連れて行つたという人がうちの壕にまた舞い戻つて来たんですよ。大尉ですよ、軍医大尉。「大尉殿、あき姉さんは」といつたら「戦争だよ、僕たちわかるか。戦争だもの構つておられるか」とおっしゃるから。「大尉殿がつれて行かれたでしよう」といつたら、「戦争だものそんな女なんか構つておれんよ」とおっしゃるから、そこでわたし少し口論をしましたけれど。「もう戦争はすべてすんでるんだよ、そとは静かで、まだ君たちは飯も食つていないのか」とおっしゃるもんですからね。ああそうかねと思って夜そとに出で見たらほんとに静がなんですよ。それからはじめて戦争は終つたんだなと思つて、その晩からみんな飯炊け、炊けと中尉殿や准尉がいふんです。少佐殿は何も言ひませんでしたけれども。

それで飯炊け、炊けいうもんだから炊事の女たちも水汲みに行つて、水も飲んでないもんだからそこで水を飲もうとしたら、「ねえ、この水にがくて飲めないわよ」といつたら「毒が入つているのではないか」といつて、まず汲んで行つて見ようねということで、バケツの一杯汲んで行つたら、ウジが浮いてるんですよ、ウジがいっぱい湧いているんですよ。あつちでころころして足にかかるていたの、あれは人間の骨だったかもしねいね、と話し合いました

が、その水をそれでも飲んだらにがくつて、黄燐弾というのが入つておるわけですよ、黄燐弾。あれを投げつけられた跡は青く光つておるんですね。土なんかに当つたかもしませんが、土や岩が青くして螢の光ともちがつて、変なのが光つておるねえって、感じましたが、黄燐弾を投げられているとはわからないから、汲んで行つて見たんです。中尉なんかが、黄燐弾を投げ込まれているんだよ、といつたが、みんな渴いているもんだから、これをみんなガブガブ飲んだんです。わたしは、にがくてどうしても飲めませんでしたので、半の溜つたのを飲みましたけれどもね。

でもその水でご飯を炊きました。にがくて食べられませんでしたが、それでも腹ごしらえはしておかなければいけないと大変と思って、火を通してありましたから食べましたけれども、そんなに食欲はないですね、欲しいとも思いません、死ぬ、生きるとも考えない、ただ無意識のうちに食べる欲が出たんじやないですかね。そういうふうにしているうちに夜になると静かだし、昼は出られないといふことがわかりますからね、米須の前部落にテントが沢山張られておるよ、という話をききましたし、だから今うつかりそこに出ると、何か、ガランをつけ、線が引つ張られているのでそれを切ると、爆雷ですか、何か仕掛けられているという話があつたし、それが動くと、照明弾が上るようになつていてるという話をきましたので、ただ壕の付近を、芋畠だったところを掘じくつて芋を取つて、お米を少し集めてあつたが、もう食糧集めです、それからは。それで近くのほかの壕にお米があるということもわかりましたので、そこから比嘉さんという人ですね、防衛隊長当番していた比嘉

さん。あの人は男だからといってあの人には坦がして、女は後から持ち上げるようにして、六袋くらい集めたと思うんですよ、お米も。大きな俵ですよ、二斗俵ですか、わっしょいわっしょいして持つて行つて六袋ぐらい置いてですね。

それから芋を掘られるだけは芋を食べて、野菜も暗闇ですけれども野菜をまがして取つて、どうして食べたかわかりませんが、葉っぱがあるということもわかつたし、また芋蔓の葉ですね、それも取つて食べました。

それから兵隊は筏を組んで黒潮に乗つて沖縄から本土へ行くという計画を立てているわけですね。それは七月の初め頃だったのでないかと思いますが、筏を組んだらその筏の上に水を積まなければいけないから、海の方に井戸があるらしいね、とおっしゃるから、清水が流れ出るんですよ、大渡浜のところに、というと、米須の浜もあるんですが大渡浜が歩きやすい、米須の浜はアメリカが占領しているから水汲みはできないということで、大渡浜へ行つたんです。

その頃は、夜歩くと、太郎、次郎だったと思うんですよ、太郎、

太郎といつたら、次郎、次郎という合言葉があるわけです。一郎とまた何とかと言葉がありましたが、大渡辺のところへ連れて行きまして、大渡浜の水のあるところに大勢の人が坐っているんですよ、太郎、太郎と言っても返事をしないから、あれ、大変だよ、といつて砂の上を後に駆うようにして下つて行つてから、また太郎、太郎といつたら「はい、日本軍だよ」というから、へーえと言つてそこが水ですよ、と知らしましたけれども、そこに三、四十名くらいいたと思いますが、どこかああたりの山にこもつていた人たちではなかつたですかね。その人たちも元気だね、とわかりましたが、もうわたしたちだけが生きていて、他の人はみんな死んでいるとしか思つていなかつたですよ。今申し上げるのは七月のはじめ頃のことですよ。

もうそれからはほんとにモグラ生活ですよね、屋は壕の中にじこもつて、夜は夕飯炊いて、それから食糧集めに行って、毎日がそれの繰り返しなんですよ。生きるということも考えなければ、ただ食糧を集めることの欲と、ご飯を炊いて食べるということ、その別に何も考えなかつたんではなかつたですかね。兵隊なんかは筏を組んで逃れることを考えているもんだから、井戸を見せてくれという。それでいつしょに行つて、その井戸を見せてやつただけのものであつてですね。

この兵隊がまずかつたのかどうかしらないけれども、その曹長は、「ガスエソ」みたよになつてですね、その筋肉がやられてるもんですから、すぐ見る見るうちに出血はするし、そこが腐れで来ますからね、水は欲しいもんだから寝台に転がつたまま、汗はかきかき、水飲ましてくれ、水飲ましてくれといつて、曹長殿、水を飲んだら大変ですよ、水は飲まないで下さい、といつて、「いや、僕は水が欲しい、水が欲しい」といついたが、炊事婦の人たちが水を汲んで来たら、ゴーゴーゴーと飲んで、二、三日して亡くなりました。あれからは、もう筏は取り止め。

それから、食糧の芋掘りや野菜取りなどして過して、八月の二日の晩ですね、その日は食糧さがしをして来て、壕の入口に坐つたら、一機の飛行機が、飛んで来たんです。その飛行機が、探海燈ですか、あれが与那原の上の海から光つて来るんですよ。そうした

らそれを挿もうとするんですね、ところが、それが挿まれないわけです。その一機は無事に帰ったと思うんですよ。三日に入っているか二日の晩になっているかわかりませんが、もう明日は日本軍が逆上陸をして来るという話し合いをしました。

壕の中に入ったものが、翌日の十二時頃、アメリカがサアサアサアサア音のする電灯ですね、サアサアサアサアと音は聞こえますけれど明りをつけながら来たと思うんですよ。何とかかんとか英語でベラベラしゃべりながら来るんですけれど、わたしたちに英語はわからないわけです。

そうしたら一メートルほど前でしたね。そこに寝台が二つ並べられた、その壕は一間幅くらいあつたんじゃないですかね。そこは半分は何か壁があったと思うんですよ。土の壁であったのか、何かの壁だったのか、その半間が通路で、半間は寝台、戸板ですね、それで敷いてありました。

そこに毛布を引っ掛け하였습니다からね、その毛布は三枚くらい引っ掛けたと思ったら怪我しないですかね。そこは半分はもう駄目だらうと思うたが、痛みは感じないんですよ。膝を立てたりましてね、わたしたちの上の方では、パンと破裂してしまったんですよ。それが手榴弾ともわからん。ただ何か弾だなと思ったんですけど

わたし弾の音も聞いておるし、ビンタもはられておるし、自分はもう駄目だらうと思うたが、痛みは感じないんですよ。膝を立てて坐っていたんだが、前の寝台に少佐がやすんでおられたが、その後で話を聞いたたら。「わたしあつちへすぐ逃げたよ。だけど足、こつち怪我してんさ」というもんだから、この人も治療してあげた。

今度はわたしの母の従妹に当るシゲ姉さんがいないので、この人はやられたのかなと思ひながら、シゲ姉さん、シゲ姉さんと呼んだら、長いこと経つてからですね。「あれッ、お前たちはどうしたのか」というから、「みんな怪我したけれどもシゲ姉さんは大丈夫か」といつたら、「お前たちは怪我したら有難いことだ」という。それで「怪我したから有難いことだということもあるの」といったから、また「お前たちは怪我したら有難いことさ」といつたからもう変な話をするわけですよ。「もうこっちにはおれなくなるから、アマンソーエー壕へ行こうねえシゲ姉さん」といつたら「うん、アマンソーエー壕はわたしがよく知っている。昨日武部隊の作業で昨日行つたよ」とずっと以前のこととを昨日のことのように思つてゐるわけですよ。

それで怪我で脳をおかされてるのでないかと思って、後で電気をつけて見たら、この人の目が大きくはれて変になつてゐるもんでですから、あはあ、この人は脳にも破片が入つたんだなということ

寝台越しに前を見ていて、バット明りがつくと同時に、ピシャットびんたをはられた気持ちで、わたしは何の弾でやられたかなあ、と思ったが、でもアメリカがそこにいるということはわかつていますので、じっとしていました。手の切れた文姉さんという人が、文さん文さんわたし怪我したよといつて、うえーーと泣いたんですよ。それでわたしは、アメリカ兵がそこにいるよ、みねさん。わたしも怪我したから泣かないで頂戴い、みんなつかまつたら大変な目にあうからと、やっぱりアメリカに捕まるのがただ恐いというわけなんですね。

それから足痛めたカズさんという人ですね、その人もわたしも怪我したというので、じやわたし治療してあげようといつて、自分の救急力パンをさがしたらもう無いんですよ。弾で吹っ飛ばされました。それでポケットに入れてくれる綿帯で庄さて応急処置をしたんです。それから綿帯でしめようとしたら、わたしのバンドでしめて頂戴いといって、バンドをはずしたから、じやバンドで止血留めして置こうね、といつて、手でさわってしめてやつた。それからまた信姉さんという人がわたしもといふことでその人たちみんなの治療を一通りしてあげました。わたしは足を立てて坐つていたので、その線だけ、肩から下と足までやられたわけですよ。自分は痛みを感じないので自分のことは、大して考えませんで、あきらめた気持

がわかりました。それで、「シゲ姉さん、あなたも怪我しているよ」といつたら、「へえッ、わたしは怪我はしない、どこも痛くはないもの」というから大丈夫と思つたんですけどね、「いいえ、怪我しているよ」、「そうか」というので、「アマンソーエー壕、シゲ姉さん、ほんとにわかるの」といつたら「うん、わたしは昨日、ミーヤーアザ（屋号）のお婆さんの芋蔓を頭にのつけて持つて來たよ」とまた変なことをいつてから、「おい、われわれこれだけで米須の前を通から着物を持って舞つて見よう、そうしてアメリカたちを魂消げさせてやるうじやないか」、「シゲ姉さん、何んでそんな変なことをいつの」、「何で、夕飯を早く炊きな、カンダバーパー（芋の葉）を入れた雑炊を炊きな」……。

そういうような話をしていますと、ほかの隊の衛生兵がやつて来て、指を怪我したが、自分で綿帯したんだが、指が全部引っ付いている、メスで切り離してくれないかといいますので、わたしもそれくらいのことはできますので、やりましようね、といつて指を別べつに離して、綿帯も別箇にやつて、癒つたんですよ。

伍長が軍曹がだったんですが、そうしたらこの衛生下士官の方が、今度はわたしが恩返しして上げましようといつて、わたしの足に指を突つ込むんです。指が入り込むもんですから、ああ、これまでは、わたしは長いこと生きられないかもしれない、と自分で思つたんですが口から出してはいいません。言つたらあの人たちを心配させてはいけないからと思ひまして、それだけはわたしは自分でいくらか気丈夫だと思いましたが、もうそれからは歩くことができないんですよ。せんぜん歩けないし、だからその壕から出る時も四ツん

匍いで出ましたけれど。

それから日が暮れて、兵隊なんかいめいで飯を炊いて、突破の準備ですよ。わたしは救急カバンを一旦は見失つてしまつたが、土の中に埋っているのを掘り出してそこに置いてあつたら、みんなを治療していく間にこの救急カバンが行方不明になりましたね。また後でさがし出して調べて見たら鏑箭なども誰が取つたかもうないわけ。でも命が大丈夫だから今度は逃げる準備もしないといけないということで、明日までここにいると、どんな目に会わされるかわからんからといって、みんな食事も取らないで準備をしなさい、突破の準備、カズさんが一番疵が浅いから、シゲ姉さんを負んぶして頂戴い、とわたしは頼んだわけですよ。

それから突破ということになれば、お水も持つていなければいけないと考えたし、お米は日本軍の靴下を配給貰つていましたので、これに詰めて二つずつお腹に結びつけて、紐につるしたんですよ。わたしは匍つて歩くことしかできません。一応馬乗りされた時にわたしたち着物は、置いておくと、アメリカに取られてあれたちに利用されでは馬鹿らしい。わたしたち死ぬのであれば、水の中に突込んで駄目にして置こうとしました。しかし今のところ、壕から

出さえしなければ命は大丈夫だと思いましたので、生きている間は着物がないといけないからということで、またその着物を出して洗つて、壕の中に干して乾してからみんな着換えしたわけなんですけれどね。着換えて残つてあるのは、持てるだけ持たないと、思つて体に全部巻きつけて、肩までまきつけて持つたつりなんですけれどね。

お米も持つし、わたしたちはもうそれだけの範囲しか持てないから、これで出かけることにしましたが、シゲ姉さんのことです。それでシゲ姉さん「あなたまだ眠たいの」といつたら、「そうではないよ、わたしは船を漕いでいるんだよ」、「シゲ姉さん、しっかりして坐つて頂戴いよ」といつたが、手をゆるしたらすぐ倒れて寝転んで起きて坐れないんです。脳神経が侵かされているのかそれはわかりませんが、全然坐ることができませんでした。

それでこの調子では連れて行くことはできないし、わたしたちが移動して場所が決つてからシゲ姉さんは連れに来ようということ、わたしは四ツん創いで出ました。

それから手のない姉さんも、出血がひどい。それでも最初の日ですから、その日は充分歩けたんですよ。それでわたしの母の壕まで行つて、向こうの壕に入れたら向こうの壕にいようと、そこで、行つたら、誰か足の丈夫な人に見て貰おうということで、カズ

さん、壕見でおいでといつたら、カズさんは、「いいえ、わたしはできないもの」というので、それでは「わたしが見て来るからね」といつて坂で山の上ですが匍つて行つたらその壕は滅茶苦茶に埋つてしまつておるんですよ。

それで戻つて来てから、その壕は散ざんで埋つてしまつて入ることができないことをみんなに知らして、米須の大通りで学校の東がわに出て道なんですが、そこを出て山と山との中間ほどにわたしの実家の畠があるんです。

その畠を越えて行くとナーシンダーラブ小といつて、壕が三つあります。その一つは文子姉さんの家族が入つている壕です。そこに行こうねといつて、その壕に辿りついた時に夜が白じらと明けて来るわけなんですね。ほらもう大変、もうこれからそとにいるとかといつたら、「いや、こつちはアメリカが来るよ」というんです。それは大変だと思つて、隣りの壕はどうですかねと訊いたら、「隣りの壕は来ないよ、わたしたちはアメリカの作業をしているのよ」なんて嘘言つたのか何かしりませんが、甘藷をガサガサ食べてましたんです。

それから隣りの壕へ行つたら、何か骨だったと思うんですが、骨みたいのがゴロゴロしているんですよ。もう終戦二ヶ月になりますからね、疲れていますから匍つて来て、骨だったと思うんですけど、すぐその上に横になつたんです。

そうしたら顔などにボタリボタリ上から落ちるもんですから変なぬるぬるしたものが落ちるよとわたしが言つたから、「これはわたしやつたんだよ、血が胸の上に溜つてたから、それを取つて捨てたんだよ」と文姉さんがいふんです。「文姉さん、そんなにして捨てないでよ、わたしたちの顔に落ちて気持ちが悪いわ」、「血が溜つて気持ちが悪いのよ」、「気持ちが悪くても、取つてそばに捨てて頂戴い」、文姉さんは手を胸に置いたらそこに血が大分溜るんですね。止血止めもやつてあるわけですがね、動脈でなくて静脈ですけれどね。静脈でもコットン、コットンと垂れる血が一晩中で溜るわけなんですよ。それからもううづつそりなつてしまつてしまつた日で、日が暮れかかるうとしたらわたしたち、今度はアマンソーホー壕といつて、マイアン壕といつたところに、大渡部落の上の方です。マイアンソーホー壕といつた壕は大きいからそこへ行つたら、みんながいるという気持があつたんじやないですかね。そこへ行こうねえといつて出たものの、その文姉さん、ふうらうらして歩くことができなくなるんですよ。「文姉さん、わたしでもこんな四ツん創いで歩くから行こうねえ」といつたら、「うん、わたしはどうせ駄目だから、あなた方はマイヤー壕まで行つて、もしうちの両親がいたら、こうこういうふうであったと話して頂戴いね、わたしは生きる見込みはないから、水も腹いっぱい飲んでわたしは死にたいから、あなた方は行つて頂戴い」、「いや、姉さん、大丈夫よ、わたしでも四ツん創いで行くんだから行こう」というんですけども、「もうできない」といつたんです。

その壕から突破する時、日本軍の頭の髪の薄い兵隊でしたが、こ

の兵隊をほかの兵隊がつれて行かないもんだからわたしたちについて来ておるんです。それでこの兵隊は、わたしたちが突破する時は見えるんですが、壕の中に入る時は見えないんですね、どこへ行くかわからないが。それでこの兵隊が水筒に水を持っておるもんですから、あなた、この人が水を欲しがっておるから飲まして頂戴いと頼んだが、飲まさなどというわけですよね。それで、「あなた飲まないなら連れて行かないよ、わたしたち壕へ案内しないから」といつたら「うん、そらか」といつて飲ましたんです。

そうしたら文姉さんはぐらぐらと飲んだんです。この兵隊は文姉さんを払つたつもりだったかもしれないが、ビンタはねたんですね。その力で文姉さんは倒れてしまつたんです。もう大分衰弱していましたから。それで、「もう、あなた、たまたいたから連れて行かないよ」とみんなで怒つてやつてですね、まだ子供だったと思つたんですが。

そうして文姉さんが、自分は最後の別れかもしれないからといいましたが、この人は頭が鋭くて、家庭が貧乏のために女学校へ行かなかつたが、珠算がとてもよかつたんです。その人が農場で会計をしまして勤めておつたんですが、武部隊の兵隊が貯金通帳を預けてあつたらしいんです。その武部隊の兵隊のうちに、これに住所があるから、何処そこに送つてくれないかという。文子姉さんは自分は駄目だと思つたのでよう、あの亡くなつたカズさんに頼んだそうですが、「いいえ、わたしそんなもの預からないよ」といつて全然引き受けなかつたそうですね。今から考へるとその人は、自分の生命はどれだけしか持たないということをわかつておいたのかなと思つたんです。

その人が井戸まで下りて行つて、夜が大部明けてですね、水も飲んで、八月の真昼ですからね、暑くて木陰でなくてただ木のそばに坐つていたそうです。その時にアメリカが、グワガワアして来たもんだから、びっくりして、自分の烟に桑煙があつたんですね。葉っぱは全部落ちているけれども、桑煙の中に逃げたらしいんですね。そしたら五、六人といつていましたが、抱きかかえられたそうです。そして足をバタバタしながら助けてくれ、助けてくれと叫んでね、そこからもとわたくしたちが出た大通りに車が止めてあつたそうです。バタバタバタするのを車に乘せられて、山原の久志小の病院というんですか、そこへ連れられて行つて、手もそこで切斷してこの人は元気になりました。

手も腐つてしまつて、わたしたちといつしょだつたら、あれから一ヶ月余りですからね、別の壕に行つて、やっぱり戦後なつて姉さんは別れてほんとに運がよかつたのね。人の運命はわからないものね、と話をしていると、わたしの同級生が、巡查しているんですねけれど、その人がね、おい、米須のところで食糧さがしに行く時に、真昼だからどこぞこの壕へ行つて食糧さがしに行こうな、といった時に、アメリカに抱きかかえられて助けてくれーとあはれている女がいたがトラックに乗せられて行く女がいたよと話したら、「ああ、これはわたしだ」といつたので「ああ、あなただつたの」と笑い話しおなりましたけれどもね。その人はわたしたちと別れて、翌日捕虜されて命拾いしたわけです。

それからわたしたちは、その晩でアマンソーといつ壕へ行きましたら、ちょうど三日月が出てた時ですからね、新曆の八月の四日か五日頃だつたと思いますね。旧もあり日がちがわないので七、八日になつておいたのではないですかね。その時にマヤン壕といつところへ行きましたら、カズさんという人が、「ここはみんな死んだ人だよ」といつたんですよ。それでは入れないね。またそこにいたら殺される、とはいつたんですが、それでもみんな疲れているもんだから、そこは山ですから、横になつて倒れていると月が見えるわけです。わたしは月だけは見えるけれども、何だか自分の目前は一本の線で張つてあるように真闇くなつて、何かで塞がれているようで、わたしは目が見えなくなつておいたんです。ただ月の量だけが滻に見えたんです。人の顔も全然見えないし、珍しいね、どうしたのかね、と思つたんですが、近い人は黒くなつて見えるが、遠く

から歩いている人は見えないんですね。四日か五日の月ではないですか。

そうしたら兵隊が水汲み桶を担いで行く、水汲みかもしれないよ、というから、民間の人もいるかもしれないよ、また壕もあるかもしれないからね、その兵隊たちに早くついて行きましよう、といつて後を追つ駆けて行つたつもりだが、見えなくなつてしまつた。そういうので、それではもういいさ、といつことになつた。そうしておうちに夜は白みはじめたわけですよ。それから大渡の上の甘蔗畑に下りて来ましたが、甘蔗畑といつても、葉っぱはないし、短い甘蔗で隠れても頭が出来るといつたところでした。この甘蔗畑に屋中は寝ておこうねといつて、わたしは歩くのは億劫なもんですから、持つておる着物で、甘蔗を柱にして日寝をつくつて、その陰に寝転んでいたんです。が、変な音が、ヒュー・ポン、ヒュー・ポンといつた機銃の弾が落ちる音だつたが、ごく間近かに落ちるんだね、ショット来たらポット落ちる。自分を目がけて来ているかもしれないねと思うんですが、それでも平氣ですよ。死ぬといつ恐わざもないから、無意識に、弾が飛んでいるね、といつらしく考へませんしね。

それから信姉さんとカズ姉さんは、もう足も歩けましたからその人々は山へ行つて草叢に寝ておるわけですよ。そうしたら兵隊が昼間に来て、甘蔗をボキボキ折つておるんですね。それで、あなたそこで昼間に甘蔗を折つていたら敵に見つかつて殺されるよ、とわたしが怒鳴ると、ちよつと折ののを止めて退いて行くが、また来て、ボキボキ折るんです。珍らしいな、この兵隊、頭がどうにかし

ているのかもしないと思いましたが、取るだけは取つて行つてしましました。

そうしてその一日甘蔗畑でわたしは過し、あの人たちは、どこの草叢か木陰があつたかしりませんが、そこで過して来ましてね、日が落ちようという頃まだ明るかつたんですけど、米須の部落の前に見えるわけです。「おい、あのテントよ、あんな沢山のテント」といいますので、「どれ」、と首を起したら見えるわけですね。

「もう、米須の人は誰一人生き残つてはいらないだらう」といつたんですね。そうして学校のところを見たら、兵隊が二、三名何か担いで来る、「おい、糧抹捨いの兵隊たちが来るよ。」とどうから「あれたちが来るまで、上の部落の道まで出るようになさい、そらしないとわたしたちどこへ行けばいいかわからないから」というてそこへ行くことにしました。そこは兵隊たちが山に上るところになっています。

それを見ると、摩文仁岳までは遠いのに、わたしは足も痛いし大変だな、と思つたんですけれど、着物もあるだけ、足を巻いてくびつて四ツ匍匐になつて歩いているので、もう足が痛くなつてゐるですよ。洋服でもぐるぐる巻いて後では匍つたんですけどね。あんな遠いところまで行くとなると、わたしはどうしても駄目だはずだ

がどうしようかね、と思いながら、そこに気だれして止つていたわけですよ。

そこへまた、後の兵隊さんが來たので、わたしはまた「兵隊さん兵隊さん、どこへ行きますか」と訊いたら、「おい、あなたはどこの人か、沖縄ンチユ（の人）かね」というので、「わたしは米須の人ですよ」。「へえ、ワッターン沖縄ンチユヤサ（わたしたちも沖縄人なんだ）」といふから、「それではどこへいらつしやるんですねか」。「すぐその近くの方に米須の人がいるよ」。「何という人ですか」。「勝ちやんという人と、春子という人と」、もう一人勝ちやんという人の妹たがいるよ」というので、「じゃ、この勝ちやんどちら行くんですよ。

五中隊の壕はアマンソーホー壕といつたわけですが、その壕へ行つた大隊本部の看護婦さんが来ていましたよ、と誰かがいつたらしく

ですよね。したらあの二人は早いから早く出でているんです。わたしは倒つて出た時に兵隊たちは来ましたので、「兵隊さん、どこへ行きますか」と訊いたら、「摩文仁岳だよ」という。「摩文仁岳には人がいますか」、「うん、沢山いるよ、君たちもおいでな」といつてから行くんですよ。

それを見ると、摩文仁岳までは遠いのに、わたしは足も痛いし大変だな、と思つたんですけれど、着物もあるだけ、足を巻いてくびつて四ツ匍匐になつて歩いているので、もう足が痛くなつてゐるですよ。洋服でもぐるぐる巻いて後では匍つたんですけどね。あんな遠いところまで行くとなると、わたしはどうしても駄目だはずだ

それで中頭の人で名は訊かなかつたんですが、それから慶良間の人で中村という、後でわたしと英語訓練でいつしょになつた人ですが、この人たちがお米を取つて来ながらいつしょに行きましたが、この姉さんやられてもう、三日目になつていたわけです。三日目でしつれど寝台を蔽ひ被されて死んでいるんですね。その妹は、「変な持だったわよ」とその妹は帰つて来ていました。「一番末の妹がですね、「あなた姉さんの顔を見て来たね」と訊いたら、「うう

ん、わたし恐くなつて、寝台が蔽ひ被されていたから、だけれど寝台は片づけて来たけれどねえ」といつていましたが、寝台というのは、人家の戸です。それでアメリカ兵は、その翌日も入つて來たんだがあ、ということをわたくしたちそれから想像したんですけどね。この人はもう死んでいたのか、生きていたのを殺されたのか、このことはわかりません。「あなた、あつちまで行つたのに、姉さんの顔も見ないで帰つて来る、あなたは無情の人だね」と中の姉さんを責める言葉つきで、その姉にすがりついて泣きながら言つていましたがね、まだ十四、五歳くらいの娘でありましたね。あれを見ていると可愛想なりませんでした。

そういうことを見たり聞いたりして、それから二、三日後のことですが、米を取りに行く兵隊たちに、あなたが米を取つて来たらわざしたちにも一升くらいたずつ分けて下さいねということで、それで一升くらいたずつ貰つたんですよ。それから自分の持つて來た米もあつたわけです。それで、その米で雑炊を作らうねということになりました。それで、前に申しました慶良間の中村さんと、富姉さんといつて今新垣に結婚しています。久米島の人ですがその人と、大島の方で伊良部百合の花をよく歌つていた人がいましたが、その方は元氣で帰られたと思ひますけれど、その方と三名で、その三名は同じ部隊であつたらしいですよ。その三名でわたしたちに雑炊をつくってくれる約束をして、お米を半分ずつ分けてやつたわけですよ。あの人たちにお米を半分やつて、わたくしたちはその半分で、そうしていつしょに食事をすることになる、あの人たちは二重に得するわけですね。雑炊は、粉味噌と、芋蔓の葉を入れて作るんで

すが、どこからかがして来るかわからないが、空罐詰カンカンなど、それで雑炊していつも食べて、大体そこに二十日間くらいいたと思うんですよ。米は少し入れてカンドバーを沢山入れて雑炊を作つて暮していたんですね。

その御飯を炊かない前に、カズ子という人が破傷風に罹つてしまいましてね。うん、うんと口が開けられなくなつて、「わたし口が動かなくなつていてるよ」というもんですから、「あら、それならカズさん、あなた破傷風だよ」といつたんです。その前に、知念で兵隊が破傷風で死んだのを見たことがありました。そうしたらカズさんは、「わたしは、この病気にかかつたらおしまいだから、家族の夢もよく見たら、自分なんかほんとに親不孝でこんな目にも遭つているかもしれない」というのですよ。

それで「いや大丈夫よ、だから気をたしかに持つて頂戴い」と話して、それがご飯が欲しいというもんだから、「じや、信姉さん、この間お米取りに行った人たちがご飯炊いてる筈だから、その人たちにお願いして、ご飯貰つて来て頂戴い」といつたら、「うん、わたし行かないよ」というんです。そういう時に田舎の人たちは縁起をかついでか厭やがるんですよ。それで、じやわたし貰つて来るよといつて、行って、すみませんが少しご飯を下さいといつたら、ご飯はないよというんです。「あのねえ、破傷風罹つてる人がご飯を欲しがつてありますのでお願ひします」といつたら、じや少し残つてないからこれだけ上げようね、といつて、ちょっとだけくれたんですね。それでこれを持って行つてやつたが、もう喉から落しきれないと

も起きていて頂戴い」というので、「ほい、はい」といつて起きていたんです。そうしたら信姉さんという人は、「わたし疲れてるから、ちょっと寝て置こうね」という。信姉さんがそういうのでわたしはもう眠ることはできないわけですよ。そうしたらこの人（カズ子）はスウスウ眠つたんです。こんなに眠るから大丈夫だらうと思つたんですが、それから約一時間半くらいい経つてからですね、ワッと叫んで手と足が反り返るんです。腱が伸びたように思われたんです。「カズさん、何にかよ」と大声で呼んだが、もう何の言葉もない。「カズさん、カズさん」と呼んでももう全然、何も言わない。それでわたしは、「信姉さん、カズさんは死んだよ」と信姉さんを大声で呼んだら、信姉さんも、「へえ」といつて飛び起きて、二人で、「何とまあ、こんなに簡単に死ねるものかね、こんなに簡単に死ねるのなら羨ましいね。わたしたちもこんなに簡単に死ねたらいいのにねえ。カズさんはこんなに簡単に死ぬのに、わたしたち二人は生き残つて、わたしたちが親不孝だったのね。まあ、今晚は、兵隊さんたんに、こういだどうでお願いしましょね」と話し合いました。

アマンソーラー壕というのは、蝸の殻のようにぐるぐる廻つてですね。あちこち部屋みたいになつたところがあるんですよ。そこに兵隊なんか入つておるんですよ。死んだ人は、その壕の入口に沢山集めてありました。

それからわたしたちが捕虜になつたのは九月七日であります。が、九月の六日の晩になつて、わたしはずつと寝たつきりであります

です。何とかして食べさせようとしたが、どうしても食べることができない。

今度は甘蔗を、銀行の息子さんといつて軍曹がだつたんですがその方が英語も達者の人でありますから、この人は大学卒の人ではなかつたですかね。この人が食糧さがしに行って、帰りに甘蔗を持って来て、「さあ娘さん」といつて、通る道のそばに、壕の中ですけれども三疊くらいの部屋になつてゐるんですよ。そこがわしたちが寝ているところになつてましたので、そこへ投げてくれたわけですよ。それで、これを歯で皮をむいて、歯でかんで汁を搾つて、カシカンに入れて飲まうとしたらそれも飲むことができませんでした。「わたしはこの調子だからね、もう駄目だから今晩は起きていて頂戴いね」といつました。その時はちょうど昼でありましたから。「うん、起きているよ」といつたんですが、そのまませんでした。「わたしはこの調子だからね、もう駄目だから今晩は起きていて頂戴いね」といつました。その時はちょうど昼でありましたから。「うん、起きさせてやつたら、もう、また寝かしてといふ前に、「自分で起して坐らしてくれ」といつましたので、うんといつて、じや信姉さん二人で首をつかまえて起そらねといつて、首を掴まえて起こすと、首は真っ直ぐ硬わばつて、そり返つてゐるんですよ。それを起して坐らせてやつたら、もう、また寝かしてといふんです。そんなことを何べんも繰り返してました。が、もうわたしは大変だと言つてから「こうこうだし、もうわたしの病気は癒らないから、あなたがたは、わたしが見守つてやるから、いつまでも元気でね」といつんです。

「何でカズさん、そんなことをいうの、そんなこと言わないで頂戴い、もう三名、いつまでも元気であるようにしようよ。」「わたしは大変だと言つてから「こうこうだし、もうわたしの病気は癒らないから、あなたがたは、わたしが見守つてやるから、いつまでも元気でね」といつんです。

したが、信姉さんという人が、後で丈夫になりました、あの人人が水を汲んで来たり、芋蔓の葉を取つて來たりして、あれをゆでて、粉末味噌がありましたから、それであえて、命を繋いでいたわけです

がね。

芋蔓の葉は、堅いのですが、ゆでると柔らかくなつて食べられましたが、もうそれまでには、すつかり骨と皮とになつていて、わたし五十七、八キロあつたと思いますが、三十何キロくらいに瘦せていたんじやありませんかね。

今から考えると、粉末味噌と芋蔓の葉を食べてたので元気だったかもしませんよ。お米のある間は中村さん方が、雑炊をつくつて下さいましたが、その後はもう粉末味噌とカンドバーだけを食べてました。

九月六日の日でしたが、ある兵隊がアメリカ兵に掴まえられたんですね。掴まえられて百名へ行つてですね、向こうに捕虜されて収容所ができてるということもわかりましたね。この人が、わたしが住んでる壕の人たちは、戦争が終つてゐるということもわからな、い、じうじういうぐあいにみんな壕の中にいるから呼んで来よね、といつて、二世と相談して連れに来たわけですよ。

その一週間ほど前でしたが、アメリカ兵隊が、何か英語でしゃべりながら、弾を撃ちつづけてバッパッパッタとその壕に来るわけなんですよ。そうしたら奥の兵隊がエヘンと咳をしたので、日本語のわかる兵隊たちだったのか、「ふる、ふる、ふる」といつんです。それから吃驚して、一番壕の入口にいるのがわたくしたちですよ。ちょっと上にあがつたら蝸の殻のようにして入口がありますで

しょう。こう下りて来たらそこは壁になつて、これを横へ行つたら、大きな鐘乳石をまわつて、そこを渡らないと下りられないわけですよ。

それでアメリカ兵は弾を撃ちながら下りて来るんですよ。その前には、鼠か何か知りませんがチユチユ、チユチユという音がしてわたしたちの上を飛び廻つて歩くんですね。何でかね、珍らしいね、と思つていたら、アメリカ兵が来たらもう、一遍も通つて見ない壕ですけれど、飼つてドンドンドンドン下りて行つたり、また上のぼつたりしてそこへ行つたら、兵隊がいたんですよ。それでそこへ行つたら兵隊さんの壕に入れて下さいといつてみんな、その壕に入つたんですが、アメリカ兵はその近くまで来ていたんです。その近くにお手洗いがあつたもんだからそこを消毒してから行つてしまつたんですよ。

それでその日は、何のこともなくアメリカ兵は行つてしまつたんですね。またその翌日も来ていましたが、わたしたちはそれから頭だけ入るところの壕の奥に一メートル、二メートルぐらいあつたんじやないですかね、そこに飼つようにして入り込んで行つたんですが、そこにもまた兵隊がいるんですよ。兵隊が六、七名くらい、東京の銀行の息子さんという人は軍曹でしたが、その人の部下に、北海道やあちらの兵隊がいつしょにいるんですねけれどね、夜になると糧秣さがしに行くんです。昼中そこに眠るんですね。人々が集めてある糧秣がいっぱい階段に向かって箱が並べられてあるんですよ。そこさわつたら、アメリカの製の罐詰ですよ。

んだら、わたしは罰が当つて死ぬから、わたしはこれを放つては行かないよ」と信姉さんが言つたんですよ。

それでわたしは、「信姉さんいいよ、わたしはどうせ短かい命だからね、信姉さんは富姉さんと出て行きなさい、信姉さんだけでも元気であればいいんだから出でていっしょに行って頂戴い」といたら、信姉さんは、「いやだよ、あなたたちを放つたらかして行くとあなたの罰が当つてわたしも死ぬだろう、わたしたち二人はどこまでもいつしょだよねえといったんだから」といつてですね。その人がいつしょになつてくれたわけですよ。それでわたしも今のように助かつているわけですけれどね。

それからその晩にも大渡という部落の前方の井戸へ行きましたて、わたしたちは長いこと浴びてもいませんんで、垢だらけだはずだから、兎に角、捕虜収容所があるということを聞きましたから、捕虜つれる車が出ているということで、その晩に浴びて、翌日大渡の部落の、今健児の塔へ行くアスファルトの道路があります。よう、あつちに来たつもりです。もう夜が明けていました。

日も長いこと押んでないから、朝日の出るのを押んで見ようとして、二人で話して、米須の前を見ると兵隊ががらと並んでいるようで、ほんとに戦争はすんだかねえと話合つたのでした。

そうしているうちに、上の道を見たら、トラックが通つて行くんですよ。あんなにしてトラックを止めてわたしたちを連れないとばかり、まさか連れては行かないだろうと話していると、一台目も去つて二台目も去つて行って、三台目が来てですね、三台目が道の近くにまで來た。わたしは腋杖を棒でつくつて歩いたんですけど、ど

チキンの罐詰やら小さいいろんな罐詰やら、ああいうのが沢山あるんですよ。それを盗んで食べたわけですよ。

こんなおいしい罐詰もあるもんだけねがら食べました。そういうふうにして一週間ぐらい過しましたんじやないですかな。

それから前に話しました糧秣さがしに行って捕虜された人が九月六日の晩に来ましてね、こうこういうことで今戦争も終つてみんな捕虜になつているから出た方がいいんじやないかと、軍曹に話して、その軍曹が、今から壕にいると、却つて国に反対したのと同じだし、天皇陛下がこういうふうに命令されたというから出た方がいいんじゃないか、と兵隊に話したら、兵隊たちもみんな出る準備をしていました。

そうして、わたしたちに、「娘さんたちは、そこにいたかつたらいてもいいよ、食糧はいくらでも入つていいから、あなた方、一年分はあるよ」というから、「ああそうですか」とはいつたもの、二人だけその壕に残つていても、憲兵もないし何もないから、いいよ、太陽見て死ねるなら、いつしょに出た方がいいでしようといつて出ました。

この人五日の晩に米た等手ですよ、六日ではない。六日の晩にその壕をみんないつせいに出たですね。わたしと信姉さんという人とはいつしょでした。だけどあの富姉さんという人が、あの人はほかの部隊の方ですけれど、あの人は一人で中村さんと大島の方と三名ですから、その人が、信さんいつしょに出てくれね、といつたから、「いいえ、わたしはね、この人とわたしたち二人はどこまでもいつしょだよと言つたんだから、この人を捨てて、もしこの人が死んでしまう」と思つて、一番前に小さくなつて坐つていました。

そうしたら二世らしい人がいて、罐詰や何か配給しているんですね

が、わたくしたち二人には何もくれんですよね。なんでわたしたち二人にはくれないかなと思いましたが、また別段欲しくもありませんでした。

わたしたちが壕からいつしょに出た人たちは、出る時に、具志頭の何川といいますかね、その川のところで待ち合すことによると話合つていましたが、わたしたちがあそこへ連れられて行つたら、やはりそこにみんな待つていました。富姉さんもいたわけです。そうしたら富姉さんが、わたしもあなた方といつしょであつたといつて頂戴いね、といいましたので、いいですよ、といつて富姉さんもいつしょになりました。

富姉さんといつしょになりましたので、わたしは疵の手当てをして貰つて、それから兵隊さんたちといつしょに車に乗せられました

が、兵隊さんたちは屋敷へ連れられて行つたのか、どうかはわかりませんが、わたしらは百名に下されました。

百名へ行きましたら、作業隊が大勢な人ですよね。若い娘などお化粧もしていきますので、娘に障りました。腹立たしくて、わたしたちは今まで頑張っていたのに、この人たちが早く出て、こんなに作業なんかもしているので日本は敗けたのだと思って腹立たしく思いました。こんなに捕虜されるより娘にまた戻るう、とも思いましたが、そこへ下されたら今度は金網の中に入れられたんですよ。わたしたちは何も訊問はされなかつたのですが、金網の中に入れたんですよ。一高女の生徒も三名、金網の中に入れられました。が、この三名は特別に小さい金網で囲われていました。わたしたちは大勢いらっしゃのところに入れられましたけれども。

わたくしは、病人だからというので、百名の病院につれられて行きましたけれども、それもMPもついてですよ。わたしは歩けないから、四ツん匍匐に歩きましたら、防衛隊の人たちが兵隊か何かしりませんが、その人たちに、負ふしてやれといふんです。わたしは、いいですよ、わたしは負ふばされませんよ、といつて断りましたが、わたしはもう着物も無くなつて、袖なしの着物で、まるで乞食みたいに、髪は脱げているし、ずっと頭から怪我しているもんですから、肩のあたりも疵だらけですからね、負ふしろと言つても負ふばされないで四ツん匍匐で歩くもんですから、MPは仕方なく、わたしの後からゆきりついていました。

MPは前から一人、後から一人ついていましたが、病院へ行つたら、軍医がわたしの怪我を見て、二世に入院させなさいといつたら

てあつたわけです。

百名の一一番東、新原<sup>シンペル</sup>の近くの端しつこの人の屋敷に、広っぽいテントを立てるまで、ここから行く間にわたしは貧血しまして、気持ちを悪くしていましたら、二世が来て、「何で君は入院しなさい」といったのに入院しなかつたか」といいましたので、「いいえ、わたしは入院しなくとも自分で癒しますよ」といいましたが、後で薬をわたされましたので、自分で治療しました。

でもわたしの疵は三か年ぐらい肉がしまりませんでした。わたしの疵は蜂の巣みたいに細かい破片が入つてます。それを取り出することはできません。それで政府の厚生局で援護の話しもありまして、レントゲン写真も何度も取つて出してありますけれど、どうなりますかね。何回も呼ばれたり行つて戻つたりしましたが、あなたの方の人は、何にも当てにはならんといいました。肩や腕は肉が厚いからか、そう時とき化膿することはありませんが、それは無理しないからではないかと思います。足の場合は歩いて疲れると痛みが来たり、骨にさわってはれるんですよ。はれる時に、山羊肉や鶏肉などを食べると、余計に悪くなりますので、そういうものは食べないようにしています。

十月の末頃ですが、石川行つて来た人が、福本という人が衛生班長しているつてよ、といふので、それではうちの父に違ひないといふことで、十一月の一日に百名から、玉城の何小学校といいますか、田圃のあるところ、船越、そこまで百名から歩いて行かなければ石川行きの車は出なかつたんです。そこまで歩いて行くのですが、みんなはさうと歩いて行くのに、新原の付近から中山といいう

しんですね。それで二世から入院しなさい、と言われたが、わたしは、これらの手にかかるて懲さなくていい、自分で懲すことができる、とはねつけて、米軍に治療されるのが腹立たしく、怒りを感じてそのまま帰つて来ました。ちょうどその時、ひとところの怪我は化膿して、黒くなつて口出して來ていたんです、破片が。その破片も取らないで薬を巻いたもんですから、それ位のものも取れない救護者小、といつてまた怒りましたね。

そうして金網に戻つて来ましてから、一応解散なつたわけです。そうしましたら、そこの隊長の何か、まあ、奥さんというわけですか、Sの方で、何とかいう方の嫁さんでしたけれども、その方は、わたくしの下宿先きの親戚の嫁さんでしたけれどもね、もう奇麗な服装してですね、わたしなんかの先輩なんかの人の召使いなんですよ。

それで、その人たちに頼んで、「わたしなんか何も着るものもないからね、着る物下さいよ、」といつたら、「あれッ、何で、あなた方怪我したの」といわれて懐かしくもあるし、何か腑に落ちないような気持ちもあって、「どうしてあなた方そこにいるの」と訊きましたら、「いいえ、こっち事務所だからよ」といつていきましたが、事務を取つてました。それでこの人たちが特別に配給して下さいまして、ほんとは一枚ずつらしかったんですが、二枚ずつ下さいまして、その日に、夏ですからね、洋服の袖先をちょん切つて、そこをくぐて、半袖にして、あのブルーの黒坊色といつていたあの服をつけまして、またズボンもさあつと裾を切つてからくけで着けたんですけれど、その日に捕虜された人たちのテントを作つてました。

んですか、その頃そこではよく黒ん坊事件があるという話であります。その時からようやくびつて歩けるようになつてきましたので四ツん匍匐はしませんでしたが、あつちまで行くのは大変だからわたくし行けるかねと思いましてけれども、力いっぱい頑張つてようやく船越まで行つて一日で石川の方へ行きました。

石川へ行きましたら、うちの父の従兄弟の姉さんなんかが向こうにおりまして、そのおばさんの妹の主人が、百名からいっしょに行つたもんですから、その人たちが迎えておりました。

それで、うちの父が元氣だと思つて来ましたけれど、といいまして、わたしは、すっかりがっかりしてしまいました。

そのおばさんは、大変いいおばさんでしたので、「じや、あなた、うちに行きましょうね」といつて連れて行つてくれました。

うしておばさんは、「あなたはこんなに怪我しているから、ここには病院があるので明日、その病院へ行きなさいね」といつてくれました。

どこそこだからと教えられて病院へ行きましたら、わたしたちの化学の先生だった方がその看護婦長をしていらっしゃるんです。

わたしが骨と皮になつてしているもんだからご存じなかつたと思います。そして忙がしいんですよね、沖縄の看護婦さんたちも。それで四、五日は通いましたが、何だか道から歩くのが恥ずかしいから、お薬をかけて下さいといつて、自分で治療しました。

それから十二月か、新暦の一月のはじめにですね、名城という部落に、うちの米須出身の山原から引き揚げた人たちや、前原にいる

人たち、あちこちに元氣でいる人たち、山原に疎開していた人たちといっしょになつたわけです。

それで、實際に米須の部落にて生き残った人は三十何名だったんですよ。それから山原に疎開していた人たちが いっしょになつて、百十名ぐらいだったと思います。

石川にいる時に父のいとこおばさんの家にいる時に、山原の大川から、疎開している人たちが石川がいいということでみんな寄つていらっしゃったわけですよ。何晩間でしたか狭いところでしたが、みんな詰め込むようにしていましたが、向かいに山原に疎開していくが捕虜になつて来ていた。またいとこの姉さんのところが広かつたので、狭いでしよう、うちに来ないかとおしゃるから、そうですね、とまたいとこの姉さんのところへ行きました。

向こう行って一週間ほどして、びっこ引いていても軍の方は仕事を行けるよというもんでですから、軍に出たら何か戦果が上げられる話を聞いておりましたから軍の仕事に行つたわけですよ。それが知花の軍病院なんです。いとこおばさんなんかもそこへ行つていたんです。わたしなんかは、患者の衣服を洗濯させるところで、たたむ仕事です。わたしの部落の外間という姉さんとわたしより一年下の女子の子と三名、他の人五名と行こうね、ということで、もう恥かしいとか、気まりが悪いとか考えていたらこれは大変だと思いましたね。

それで話も、単語だけ、くつけて話したら、いくらか通じたようで、やつていましたけれど。そこに友軍もいましたが、戦果をあげると、日本の國のためだからね、といつて戦果をあげようとする

れど、出ませんで、仮職員として学校におりまして、自分の希望として、教員よりいい仕事はないと思ったんです。また一面看護学校でも行こうかと思ったんですが、こんな怪我人なんか雇う人はいないだらうと思って諦めました。戦争のお陰で、すべて中途半端になつてしましました。今になって後悔してどうにかして勉強したいといふ気持ちはありますが……。

わたくしは、戦争のためにこんな境遇になつたが、その戦争のためにひねくれなかつたという点は自分としてはよかったです。しかし、自分が中途半端な勉強ばかりして来ましたが、自分の子供たちだけは、大学まで教育を受けさせなくてはいけないと思っています。

そういうわけで主人も、一番末っ子が生れるときに沖縄大学を卒業しました。石に噛りついても勉強しなければいけないから、今からでも勉強しなさい、といつて二部で夜間でありましたから、軍の方に勤めながら、たまには、わたしもレポートの手伝いなどもやって来ました。

今は子供たちも大きくなりましたので、一番下が小学校四年になつていますからね。一昨年は研修に行きました、北海道での婦人会の交歓会にも出席して来ましたですが、普段はお人形つくりや編物をしたり、仕事だけは自分で、やっているつもりであります。

問 答

問。昨年（一九六九年）NHKテレビに出られましたがあれは、何の問題でありましたか。

答。あれは終戦の日でありました。急に政府の厚生局から言われ

んですが、今日は最初の日だから何か盗んで摑つたら大変だからと思つたりして、芋蔓の葉だけ取つて石川へ帰ることにしました。その後で白いシーツですか、そういうものを盗んで帰ることにしました。そういうものを盗まないと自分の洋服が作れないわけですね。洋服なんか作つたり、ブラウスなんか、ズロースなんか作つた。それとも、こういった盗みを、戦後はやりましたよ。それから一週間程して仕事もなくなつて、名城へ行きました。

名城ではまた、いとこの姉さんなんかといっしょにいました。その時、その姉さんの子供が肺炎を起して、水を汲んだり看護をしたけれども、こういった盗みを、戦後はやりましたよ。それから一週間程して仕事もなくなつて、名城へ行きました。

二十一年の六月ですか、米須部落は、自分の部落に帰りましたが、元気の人たちは、隠れて、名城にいる時に烟に食糧をつくつておりましたが、わたくしは病人だから、どうにでもなれといった気持ちで何も作つておりませんでした。それにわたくしの方は部落の後がわの方でありますから、そこらにはおうちは建てられてないから隠れて作ることもできませんでした。だけれども家族は十一人だし、引き揚げがあるというし、引き揚げの場合は、わたしはお芋も作つてないし、どうしようかねと思つたりしました。

それから、女学校を三年まで出た人は、小学校の先生も勤められ

るよ、という話がありました。その時、誰かがわたくしへ高校出なさい、という人がいましたが、わたしが高校へ出たらわたしの生活は誰が見てくれるかね。わたしは他人の飯を食べて生きているのに、もう学校なんか出られないでしよう、自分の目の前を考えないと、学校は後廻わしだと考えました。糸満高校は出来ていましたけ

て行きましたが、何分か時間がかかりますので、ほとんど何もいうことができませんでした。やはり昨年の五月に、九州の赤十字大会に参加しました。婦人奉仕団に入つて、何か世のためになることをしたいという気持がわたくしから抜けないもんですから、一か月に二、三日は、一日二、三時間の暇はつくれるから、それで何かみんなのためになることが尽せる、という意味で婦人奉仕団に入つたのです。

問。奥さんはこんなに半身全部、しかも大きな疵で、泥にまみれ

て、よく被傷風になりませんでしたね。

答。小さい傷の人気が却つて被傷風にはかかり易いんです。大きい

疵の人には却つてかかりません。わたしはウジが出ました。ウジは大きなウジですね、それが物凄い、骨から肉のあるだけ掉り取られるようだから、わたしの疵はきっと虫がいる筈だよ、と思ってアマンソーラへ行つてから綿帶を取りましたら、虫がグズグズグズ出て来るんですよ。それでわたしは足を曲げることができんかから、カズさん洗つて頂戴い、塩水があればできるからと思って、兵隊から塩を貰つて、塩水をつくつて、カズさん洗つて頂戴い、といつてさせようとしたら、いやだよ、わたしには恐くてできないよ、というんです。何が恐いの、これは虫だのに、といったんですけど、いやだとカズさんがいうので、わたし自分で塩水を、さあとぶつかったら、さらさらさらと全部出て来るんですよ。もうこっちもこっちも指が突つ込まれるほどの怪我ですかね。それでわたしもガタガタ震えながら、このウジ虫を取つて捨てたんですよ。ウジは堅いんですよ。

問。艦砲で怪我されたんですか。足首の関節が曲がらないのは、アキレス腱が切れたのではないですか。

答。怪我は艦砲ではありません。手榴弾の破片です。曲がらないのは、そこらへんにも破片が入っているわけです。その破片が動かせば体の組織にかかると申しましようか、痛むのです。ですから人の前に坐る時もほんとに坐ることができませんでお行儀が悪いんです。まだはれているんですね、破片は点てんと無数といつたぐいに入っていますので、化膿してときはれて来るんです。化膿してそのまま引っ込む時が困るんです。化膿して、そこから破片が出るとそこはよくなるわけです。

問。ひどいのはやっぱり左の足ですか。

答。そうなんです、左の方は頭から足までずっと細かい破片が入っています。

問（足のブツブツしているのを指でさわって）この指にさわるのですか。沢山さわりますか。

答。そうです。こつちは表面だからいいのですが、足首から、その近くの足の厚い方は深く入っています。それが移動します。その時が困るんですよ。左足だけならまだよかつたんですが、右足も並べて先きの方が出ていたのでそれもやられたわけです。

問。手榴弾はアメリカの兵隊が投げたのですか。

答。日本の手榴弾だと思います。アメリカのは破片が大きいそうで、日本の手榴弾がこんなに細かく散るそうです。アメリカ兵が來たので、日本兵が投げたのが、中途で当つて破裂してわたしたちに当つたらしいのです。破片は大小いろいろのようで、鉄でしようと

ね。

問。奥さんが捕虜になつて百名へ行かれた日、めまいされたとおっしゃいましたが、あの時の情況をもう一度話して下さい。

答。それは、わたしたちの入るテントがまだできていませんでしたので、ほかの人たちのいるテントに寝ていたんです。わたくしは、手榴弾で頭の左がわは毛が無くなつていましたが、いつしょの信姉さんは、髪にあまり風が湧いていました。やはり風が床へこぼれるよう落ちてはい歩くんですね。それを前からいた人たちが見て、汚い、と非難しましたので、二人はそこにいられなくなつて、日の照りつけるそとに出了のです。そうしていたら、貧血を起して、二世に叱られたのです。

問。お父さん、お母さん、叔父さんが亡くなられたことは、どうしてわかりましたか。

答。母のいた壇へ叔父が勤務先の東風平小学校から来られて、いつしょにいました。その壇を訪ねてあいましたが、それから間もなくその壇は、前にお話ししましたように、石油かガソリンを流されて焼かれたことは、はつきりわかっていますので、叔父も間違いなくその壇で亡くなつたと思います。それから、父は六月の五、六日に南の方で母の弟とあって、母の壇を教えられたそうですから、それが母のいた壇がやられた前日あたりになりますので、多分父も母と同じ壇にいただろうと推察されるわけです。しかし、父のことばは、はつきりはわかりません。父に、母の壇を教えた母の弟、わたくしの母方の叔父も六月十日に弔に当つて亡くなっています。遺骨

ばあさんや、兄たちが帰つても食糧に困らないようにと思つたんで

す。小さなテント小屋にいました。

おばあさんは、姉さん（兄の妻）と二人の子、四人で大分に疎開していました。兄は支那事変にて、ずっとあつちにいたんです。

答。姉の遺骨はありました。脛や腿の骨が碎けていましたので、これでは姉さんは痛つただろう、苦しんで亡くなつただろうと姉の頭蓋骨を抱いて泣きました。いつしょに歩いていた、春子さんが、ちゃんと覚えていました。春子さんのお母さんと一メートルくらい離して並べて葬つてありましたし、着いていたモノペなどで少しはわかりました。

問。ずっとまたいとこの方たちといつしょにいられたのですか。

答。またいとこの人たちに、そう長く厄介になりました。

米須に帰つてからは、東風平の学校の先生だった叔父の奥さん、おばさんですね。子供が二人、自分たちの屋敷にいましたが、わたくしは畠仕事をした経験がありませんし、足は負傷していますので、畠を耕すことはできません。

その時久米島出身の先輩にあいましたら、久米島へ行つて食糧を貰つて来ましようといつてさつてくれましたので、舟艇でこの先輩につれられて久米島へ行きました。そうしたら、この先輩のお姉さんが、米を集めたり、インゲン豆に似たハワイ豆というのを集めたり、大豆を集めたり、沢山の米と豆を貰つて、米須へ帰りました。

それでわたくしは、この米や豆を売つて、人を雇つて四百坪の畠を八十円で耕すことを請負わして、芋の植えつけをさせました。お

兄たちが帰つて来たのは昭和二十三年か四年です。兄たちが帰つてから、テントも大きいのにかえました。

た。

わたくしたちの叔父には、今も東京都の商業高校の教官をしている人がおりますが、戦争のずっと前、戦前の国体の円盤投げの選手で上京して、東京がいいというので、ずっと戦争中も東京にいました。

わたくしは、終戦の頃には、もう十六歳にもなつていましたし、またいとこなんかもいい人で仕事ができなくても、いやな顔もないで、いつしょにいさせてくれ、厄介見てくれましたが、五つ六つ、七つ八つの子供等で、塵の山をあさつて食物をがしたり、人の家の床下などにもぐり込んだり、行くところもなくさまざま歩いている孤児も大勢見ました。わたくしは、多くの不良児は、このような戦争孤児の結果ではないかと、いつでも考えさせられます。身寄りもない、食べるるものもない幼い孤児をそのままほつたら

かしておいて、この人たちが、どんなに悲しい苦しい肩身の狭い思いで成人したかということを、わたくしはつくづく考えます。日本政府はこんな孤児こそ援護すべきでなかったか、と新聞に不良児の非行が出たびに思うわけです。

# 旧 真 壁 村